

マルコの福音書による聖書入門

今日からマルコの福音書を学びましょう。新約聖書には4人の著者による4つの福音書があります。福音書とはイエス・キリストの生涯を記した書物です。マルコの福音書は、マルコによって記された福音書です。マルコは、ペテロやパウロと共に働いたイエスの弟子であり、特にペテロから聞いたことを正確に書き記し、福音書としてまとめました。この学びでは、聖書箇所を読んでから解説を読み、学んでください。この学びが、聖書に親しみ、救い主イエスを知るきっかけとなることを祈ります。

1：1～3 イザヤの預言

イエス・キリストの誕生は、700年前に預言者イザヤが預言していました。そのことが旧約聖書のイザヤ書に記されています。イザヤはイエスの誕生と生涯を預言すると共に、神が救い主の道備えをする使いを遣わされることも預言しました。実は、旧約聖書全体が、やがて来られる救い主を預言しています。「そのとおりに」とは、神の約束が成就したことを表しています。

1：4～8 バプテスマのヨハネ

神は約束どおり、救い主の道備えをするためにバプテスマのヨハネを遣わされました。バプテスマのヨハネは、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説きました。罪とは、造り主なるまことの神に背を向けて、自分勝手に生きることです。悔い改めとは方向転換の意味で、神の前に自分の罪を告白し、心を神に向けることです。そして、そのことを神の前にはっきりと表すために、人々は自分の罪を告白し、ヨルダン川でヨハネからバプテスマ(洗礼)を受けました。悔い改めこそ、救い主を心に迎え入れるために必要な心の準備です。バプテスマのヨハネは、悔い改めのバプテスマを人々に授けながら、やがて来られる救い主を宣べ伝えました。

1：9～11 イエスのバプテスマ

イエスは罪のない神の子なので、罪を悔い改める必要はありませんでした。けれども、イエスはヨハネからバプテスマを受けられました。そこにはいくつかの意味がありました。第1に、バプテスマは、イエスの公生涯(救い主としての公な生涯)のスタートとなりました。第2に、バプテスマによって、イエスが神の子であることを、父なる神と聖霊なる神(御霊)が共に証しされました。第3に、イエスを信じる者がバプテスマを受けるための手本を示されました。私たちも自分の罪を悔い改め、イエスを救い主と信じる時に、バプテスマを受け、クリスチャンとして歩み始めます。バプテスマ(洗礼)はクリスチャンとしての公なスタートです。

1：12～15 イエスの宣教

イエスはバプテスマを受けられた後、荒野に退きサタン(悪魔)の試みを受けられ、悪魔に勝利されました。そして、イスラエル北部のガリラヤで神の福音を宣べ伝えられました。イエスが救い主として来られたことによって、神の国は私たちに近づきました。神の国とは「神の支配」を意味します。神が私たちの心を治め支配してくださる時、私たちの心は平安で満たされます。福音とは、神が救い主イエスによって、私たちを救ってくださるという「良き知らせ」のことです。罪を悔い改め、イエスを自分の救い主と信じるなら、神は私たちを救い、神の国の中に入れてくださるので、す。

1：16～20 最初の弟子選び

イエスは、最初の弟子としてシモン(ペテロ)、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの漁師を選び、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」と声をかけられました。その時、彼らはイエスの招きに従い、イエスに従いました。全くの畑違いと思われる彼らでしたが、イエスと共に歩む中で、ちょうど陶器師の手の中にある土がすばらしい陶器に変えられていくように、彼らはイエスによって変えられていき、やがて初代教会のリーダーとなりました。私たちもイエスの招きに応え、イエスに従っていくなら、神に用いられるすばらしい人生を歩むことができます。

1：21～28 イエスのことばの権威

イスラエルでは、土曜日は仕事を休んで神を礼拝する安息日です。イエスも安息日ごとにユダヤ教の会堂に行って神を礼拝されました。この日はカペナウムの会堂に入られ、そこで聖書を教えられました。それを聞いた人たちは、いつも聞いているユダヤ教教師の律法学者のようにではなく、権威ある者のようにイエスが教えられるのを聞いて驚きました。汚れた霊(悪霊)でさえイエスを神の聖者と認めました。そして、イエスが悪霊をしかりつけられると、悪霊はイエスに従って、悪霊につかれていた人から出て行きました。イエスの権威は神のひとり子としての権威でした。今日も聖書には、神のことばとしての権威があります。聖書は、単なる道德、倫理、人生の教訓ではなく、私たちが罪の滅びの中から救い出す、神の権威に満ちた、生きて働く神のことばです。

1：29～31 イエスを迎える祝福

礼拝後、イエスは会堂近くのシモン(ペテロ)とアンデレの家に行かれました。すると、シモンのしゅうとめが熱病でふせていました。人々はさっそくイエスに彼女のことを伝え、イエスは彼女の手を取って起こされ、病をいやされました。そして、元気になった彼女は人々をもてなしました。ここには、キリストを迎える時に与えられる祝福が教えられています。私たちも、個人や家庭の生活に問題をかかえることがあります。イエスは私たちの問題をご存じで、そこに御手をもって触れようとしておられます。私たちが自分の問題をイエスに伝え、自分の人生にイエスをお招きする時、イエスのくださる解決と祝福をいただくことができます。

1：32～34 イエスの宣教

イエスの宣教(働き)は、病人をいやし、悪霊を追い出し、福音を伝えることでした。病人をいやし、悪霊を追い出すイエスの働きは単なる奇跡ではなく、そこには目的がありました。それは、イエスが苦しんでいる人々を愛し、神の権威をもって人々をいやされることによって、神の国が来たことを宣言するためでした。そして、人々が罪を悔い改め、イエスを救い主と信じて救われ、神の国に入るためでした。(1：15)今日も、私たちは聖書を通して神の愛を知り、イエスを通して神の救いをいただくことができます。

1：35～39 イエスの祈り

イエスは忙しい働きの中でも、必ず祈りの時をもたれました。この日も、朝早くまだ暗いうちに起きて、一人で父なる神に祈る時を持たれました。イエスは、祈りの中で、父なる神に話をして親しく交わり、父のみこころを確かめ、救い主として働くための力をいただかれました。イエスの祈りは、私たちへの模範でもあります。イエスは、私たちにも祈ることの大切さを教えてくださいました。祈りは神との交わりであり、神との会話です。次の内容で祈ってみましょう。「天の父なる神様。感謝。(どんなことでも神に感謝しましょう。) 悔い改め。(自分の罪を神に言い表し、キリストの救いを信じて、神の赦しを求めましょう。) 願い。(自分の問題を主に伝え、主の解決を求めましょう。) イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。」

1：40～45 ツァラアトに冒された人のいやし

ツァラアトという病気は思い皮膚病の一種で、この病気に冒された人は、当時のイスラエルの社会では汚れた人として扱われ、社会から追放されてしまいました。そのような病をもったひとりの人がイエスのみもとに来て、ひざまずいて言いました。「お心一つで、わたしはきよくしていただけます。」イエスはこの人の信仰を見、深くあわれみ、彼にさわって言われました。「わたしの心だ。きよくなれ。」すると、その病は消えて、その人は全くなりやされました。すると、イエスは彼に、「だれにも何も言わず、行って祭司に見せ、きよめの供え物をしなさい。」と厳しく命じられました。当時は、ツァラアトが治った人は、祭司の所に行き、神に感謝をささげ、祭司から病気が治ったことを宣言してもらうと、社会復帰ができました。イエスは、それで十分だと言われたのです。また、彼が人々に言いふらすと、イエスの望まない形でうわさが広まり、イエスの働きに支障をきたすからです。私たちににとって大切なことは、イエスを信じ、神に感謝をささげ、イエスに従うことです。

2 : 1～5 イエスを求める信仰

イエスがカペナウムの家でみことばを話しておられる時、ひとりの中風の人が4人の友人にかつがれて来ました。けれども、家には多くの群衆が集まり、イエスに近づくことができなかったので、彼らは屋根をはがし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろしました。彼らの行動は常識を超えていました。しかし、彼らはイエスが中風の人をいやしてくださると信じ、何としてもイエスにお会いしたいと願ったのでした。イエスは彼らの心の中にある信仰を見られました。そして、喜んで彼らを受け入れてくださったのです。私達もイエスにお会いするまでに、様々な困難が生じることがあります。そのような時、途中であきらめずに、イエスを求め続けて行くならば、必ずイエスとお会いすることができ、イエスの救いをいただくことができます。「求めなさい。そうすれば与えられます。」(マタイ7:7)

2 : 5 一番大切なこと

中風の人と彼の友人は、病気のいやしを求めてきました。けれども、イエスは「子よ。あなたの罪は赦されました。」と宣言されたのです。なぜイエスは病気のいやしではなく、罪の赦しを宣言されたのでしょうか。それは、人間にとって一番大切で必要なことが、罪の赦しだからです。なぜなら、私たちの罪が赦されなければ、たとえ病気が治っても、やがていつかは死ななければなりませんし、死後、私たちは自分の罪に対する神のさばきを受けなければならないと、聖書は教えているからです。神に罪を赦していただくなら、私たちは死んでも、神のさばきを受けることなく、天国に行くことができるのです。また、神と共に生きる新しい人生を歩むことができるのです。

2 : 6～12 罪を赦す権威を持つイエス

イエスは、神に罪を赦していただくことが一番大切であると教えられただけではなく、「あなたの罪は赦されました。」と宣言されました。即ち、イエスは、ご自分が人間の罪を赦す権威を持つておられることを明らかにされたのです。これを聞いたユダヤ教指導者の律法学者が心の中で理屈を言いました。「この人は、なぜ、あんなことを言うのか。神をけがしているのだ。神おひとりのほか、だれが罪を赦すことができよう。」イエスは、彼らの思いを見抜き、ご自分が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせるために、中風の人に「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」と命じられました。すると、彼の病は瞬時にいやされて、彼は起き上がり、皆の前を出て行ったのです。イエスの奇跡は、中風の人に対する愛のわざであったと共に、ご自分が人の罪を赦す権威を持つておられることを証明するためのものでした。イエスは、罪を赦す権威を持つために、神であるのに人としてこの世に生まれ、十字架ですべての人の罪を負い、神のさばきを身代わりに受けて、死んでくださったのです。

2 : 13～14 取税人レビの決心

イエスは、収税所で働く取税人レビ(別名マタイ)をご覧になった時、「わたしについて来なさい。」と声をかけられました。当時、取税人はユダヤ人でありながら、ローマ帝国のために税金を取る働きをしていました。しかも、取税人は税金以上のお金を取り立てて、私腹を肥やすという悪を行っていました。そのため、ユダヤ人は取税人を大変嫌っていました。しかし、イエスは取税人レビを弟子として選まれ、自分について来るようにと招かれたのでした。レビはイエスに従う決心をし、取税人としての生き方を捨て、イエスに従う新しい人生を始めました。イエスは、私達にも同じように、「わたしについて来なさい。」と招いておられます。そして、レビのようにイエスに従うなら、私達もイエスの弟子としての新しい人生を始めることができるのです。

2 : 15～16 罪人と食事をされるイエス

イエスは、ご自分の弟子となったレビの家に行かれ、食卓に着かれました。そして、レビの友人の取税人や罪人たちと一緒に食事をされました。罪人とは、ユダヤの律法の教えをパリサイ人のように厳格に守らない人のことを指しています。パリサイ人とは、ユダヤ教指導者の中でも、ユダヤの律法を厳格に守るパリサイ派に属する人たちのことで、律法学者もパリサイ派に属していました。パリサイ人は罪人を軽蔑し、決して一緒に交わることをしませんでした。ところが、イエスは彼らと一緒に食事をし、彼らに対するイエスの愛と招きが真実であることを示されました。

2 : 17 罪人を招くイエス

イエスは、17節で、「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」と言われましたが、ここで言われている「正しい」人とは、自分は正しい人間だと思っている人のことです。また、「罪人」とは、自分の罪を自覚している人のことです。聖書は、神の前に正しい人は一人もおらず、すべての人は神の前に罪を犯した罪人であると教えています。イエスは、自分が神の前に罪人であると自覚する人を招いておられるのです。しかし、自分は正しい人間なので、罪の赦しは必要ない考える人は、イエスのもとに来ないのです。

2 : 18～22 断食とイエスの救い

バプテスマのヨハネの弟子たちは、罪を悲しみ、罪を悔い改める表現として断食しました。また、パリサイ人たちは、律法を厳格に守るため、また、自分たちの敬虔さを人々に見せるために断食しました。しかし、イエスの弟子たちは、罪を赦される救い主イエスが来られた喜びのゆえに、断食をせず、むしろイエスと喜びの食卓を囲んだのでした。けれども、イエスが十字架で死なれる時には、その悲しみのゆえに、イエスの弟子たちも断食すると、イエスは言われました。イエスが与える罪の赦しが、私たちの心に与えられると、私たちは新しい人生を始めます。イエスの救いは真新しい布切れ、新しいぶどう酒です。それを古い生き方である古い着物や古い革袋に押し込めることはできません。新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるように、イエスの救いを経験すると、その人は新しいクリスチャンとしての生活を始めるのです。

2 : 23～28 安息日の主

イスラエルでは通りがかりの人が、麦畑の穂を摘んで食べることは許されていました。(申命23:25)パリサイ人が問題にしたのは、イエスの弟子達がこのことを安息日に行った点です。パリサイ人は穂を摘んで食べることは仕事に当たると考え、安息日に仕事をしたとして、イエスの弟子達を非難したのです。パリサイ人は、聖書の教えを超えて様々な規則を作り、自分たちが守ると共に、人々にも守るようにと教えていました。それに対して、イエスは聖書の本当の意味を教えられました。安息日は、人間が仕事を休み、神を礼拝することによって、霊肉共に安息するために設けられたのです。安息日は、私たちが、神に造られた者として生き生きと生きるために、神の配慮として設けられました。さらに、イエスはご自分が安息日の主であると教えられました。イエスは、私たちが礼拝すべき主なのです。神は、「イエス・キリストは主です。」と日曜ごとに、また日ごとに告白する者に、真の安息を与えられます。

3 : 1～6 イエスの愛

イエスは安息日に会堂に入られました。すると、そこに片手のなえた人がいました。パリサイ人たちは、イエスが安息日にその人を直すかどうか、じっと見ていました。そして、もし、イエスがその人をいやすなら、安息日の規則を破った理由で訴えようとしていました。イエスは、手の不自由な人を真ん中に立たせ、パリサイ人たちに安息日の意味を問われました。けれども、彼らは心のかたくなさのゆえに、答えませんでした。イエスは、彼らの心のかたくなさを嘆かれました。私たちも、心がかたくなであれば、イエスのみことばに応答することができません。私たちも心を開いて、イエスのみことばを聞くことが大切です。

イエスは、手の不自由な人に「手を伸ばしなさい。」と言われると、彼の手が完全にいやされました。その結果、パリサイ人たちは出て行き、国主ヘロデを支持するヘロデ党の者たちと手を組み、イエスの暗殺計画を練り始めました。イエスは、パリサイ人たちのわなを知りつつ、いのちの危険を顧みず、手の不自由な人をいやされました。ここに、イエスの愛が現されています。そして、やがて、イエスの十字架の死において、全人類に対するイエスの完全な愛が現されたのです。

3 : 7～12 人生の苦しみとイエスとの出会い

イエスが湖に退かれると、イスラエル中から、また異邦人の地からも大勢の人々が集まってきました。その中の多くは病気に悩む人であり、ある人は悪霊につかれて苦しんでいました。クリスチャンになるきっかけは、人によって様々です。その中でも、人生の悩みや苦しみにある時は、キリストに出会う大きなチャンスです。神はそのような時を用いて、私たちに聖書に対する関心や神に対する求道心を与え、私たちをキリストのもとに導こうとされます。病の時、孤独な時、試練の時、悩みの時は、神の招きの時でもあるのです。私たちは心を開き、幼子のように神を求め、神に信頼するなら、神は私たちの祈りに答えてくださり、人生の真の解決を与えてくださいます。

3 : 13～19 12弟子の任命

イエスは、ご自分に従う者の中から、特別に12人を選びました。彼らは12弟子、また使徒(遣わされた者の意味)と呼ばれます。彼らは、特別にすぐれた人ではなく、私たちと同じ普通の人でした。けれども、イエスは3年間彼らを身近に置いて教え、訓練される中で、イエスの弟子として成長していきました。そして、やがて、彼らが教会のリーダーとなっていったのです。

イエスは、使徒たちに、福音を伝える働きをゆだねられました。そして、使徒たちはイエスが救い主であるという福音を伝え、福音を信じた人たちが、また別の人たちに伝えた結果、今日、私たちにもイエスの福音が伝えられました。また、当時は悪霊に苦しむ人が多くいました。世の光であるイエスが来られたことによって、やみの支配者である悪霊も活発に働いたのです。悪霊を追い出す働きは、イエスによって神の国が来たことを証しするしるしとなりました。

私たちも福音を聞き、心を開いてイエスを救い主と信じるなら、神の救いにあずかり、イエスの弟子となることができます。そして、イエスは私たちと共にいて、私たちを弟子として成長させてくださり、イエスの愛と福音を伝える者として用いてくださいます。イエスの福音は、信じる者を新しく造り変える神の力です。

3：20～22 イエスへの誤解と中傷

イエスの働きが顕著になると、イエスに対する誤解や非難や中傷も増えてきました。ある人たちは、イエスは気が狂ったと言い、律法学者たちは、イエスはベルゼブルに取りつかれていると言いました。ベルゼブルとは悪霊のかしらであるサタン(悪魔)のことです。律法学者たちは、イエスの内にある神の権威を認めようとせず、イエスは悪魔の力によって悪霊を追い出していると言ったのです。今日もイエスやキリスト教に対する誤解のゆえに、イエスの福音を拒む人々がいます。日本では、キリシタン迫害とキリスト教禁令の約300年間に、キリスト教に対する恐れや誤解が浸透し、さらに檀家制度が確立して、仏教が家の宗教になったため、今もキリスト教に対する偏見が続いています。けれども、実際に聖書から直接イエスの福音を聞くならば、イエスの救いのすばらしさにきっと目が開かれることでしょう。

3：23～27 イエスの権威

イエスは律法学者の中傷に対して、二つのたとえで答えられました。一つは分裂王国のたとえです。もし、律法学者たちが言うように、イエスが悪霊のかしらであるサタンによって悪霊を追い出しているのなら、サタンの国は分裂しており、それでは国は成り立ちません。ですから、イエスがサタンの力によって悪霊を追い出すことはあり得ないのです。もう一つは盗賊のたとえです。その意味は、サタンの家から悪霊を追い出すためには、まずサタンを縛り上げなければなりません。ですから、イエスが悪霊を追い出していることは、すでにイエスは悪霊のかしらであるサタンを縛り上げていることを意味しているのです。イエスは、ひとり子の神としての権威によって、サタンに勝利し、悪霊を追い出されました。そして、今日もイエスを信じる者を、罪と悪魔の支配から救い出してください。

3：28～30 罪の赦し

律法学者たちは、イエスを神の御子、救い主と信じず、むしろ汚れた霊であるサタンにつかれていると言いました。彼らは、イエスを救い主と信じないので、聖霊をけがす者となりました。なぜなら、聖霊なる神は、イエス・キリストが神の御子、救い主であると証ししておられるからです。聖霊をけがす者は永遠に赦されず、とこしえの罪に定められるとは、イエスを救い主と信じない人は、罪の赦しを得ることができないということです。それに対して感謝なことに、イエスを救い主と信じる者は、どんな罪もすべて赦していただけます。なぜなら、イエスは私たちのすべての罪を贖うために、十字架で死んでくださったからです。聖霊は、聖書を通して、イエスが私たちの救い主であることを証ししておられます。聖書を信じ、イエスを自分の救い主として信じましょう。

3：31～35 神の家族

イエスの母と兄弟たちが、イエスのことを心配してやってきました。イエスは、家族の者が外で待っているとの知らせに対して、ご自分の家族とはだれなのかを教えられました。それは、イエスのことばを聞き、イエスを信じ、神のみこころを行う人のことです。だれでも、イエスを信じるなら、神の子どもとされる特権が与えられ、その人は神の家族の一員とされるのです。この神の家族の交わりは、地上だけでなく天国でも続く、神を中心とした永遠の親しい交わりです。

4 : 1～3、9～14 種まきのたとえ

イエスは群衆に種まきのたとえを話され、その後で、弟子たちにたとえの意味を解き明かされました。種を蒔く人はイエスのことで、種とはみことばです。みことばの種はすべて良く、悪いものは一つもありません。ですから、実を結ぶかどうかは、種が落ちる土地にすべて依存しています。土地とは人の心のことです。私たちがみことばを聞く時、どんな心の態度で聞くかが、実を結ぶかどうかの鍵となるのです。イエスは、聞く耳のある人は聞きなさいと言われました。聞く耳とは、みことばの意味を知りたいと願って、神に聞こうとする心のことです。そのような心をもってみことばを聞くなり、私たちはイエスのみことばを理解することができ、みことばの真理に生きて、豊かな実を結ぶことができます。

4 : 4、15 道ばた

ある人の心は道ばたのようです。固い道ばたの地に落ちた種は鳥に食べられるように、かたくなな固い心の人、みことばを聞いても心に受け入れません。その結果、すぐサタンが来て、その人の心に蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。当時の律法学者たちは、イエスに対して初めから心を閉ざし、イエスを信じようとしなかったため、どんなに身近にイエスの話を聞いても受け入れず、みことばの実を結ぶことはありませんでした。

4 : 5、6、16、17 岩地

ある人の心は岩地のようです。岩地は土地が深くないので、種が芽を出しても、日が上ると根がないために枯れてしまいます。同じように、岩地の心の人、みことばを聞くとすぐに喜んで受け入れるのですが、みことばを十分理解していないので、みことばはその人の心に深く根ざしません。ですから、みことばのために困難や迫害や試練などが起こると、すぐにつまずいてしまい、みことばの実を結ぶことができません。

4 : 7、18、19 いばらの地

ある人の心はいばらの地のようです。いばらの地に落ちた種は、成長しようとしても、いばらにふさがれてしまい、実を結ぶことができません。同様に、いばらの地の心の人、みことばを聞いてはいても、世の心づかいや富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、みことばの実を結ぶことができません。その人は、みことばよりもこの世のものを大切に考えて、みことばを第一にすることができないのです。

4 : 8、20 良い地

ある人の心は良い地のようです。良い地に落ちた種は、芽生え、育って豊かな実を結びます。同様に、良い地の心の人、みことばを聞くと心に信じて受け入れます。そして、みことばに信頼し、日々の生活の中でみことばに従います。困難なことがあっても、みことばの真理に根ざしているため、つまずくことがありません。また、この世の欲望や誘惑がやってきても、みことばを第一として生きようとするので、みことばの力がその人に与えられ、この世の誘惑から守られます。その結果、その人は、30倍、60倍、100倍の実を結ぶ人になることができます。みことばの実とは、みことばが約束する神の祝福にあずかる人生です。また、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制という御霊の実です。神はみことばを信じる人を祝福してください。

4 : 21～23 あかりのたとえ

イエスのたとえは、真理をストレートに言わず、なぞのように真理を隠す性質があります。ですから、聞く耳のない人にとっては、たとえの中に隠された真理を理解することができません。けれども、あかりは隠すためではなく、だれからも見えるところに置き、部屋を明るくするためにあるように、イエスのたとえも、聞く耳のある人に対しては、真理が明らかにされるためにあります。ですから、みことばに対して心を開き、すなおに神に聞く心をもってみことばに聞くならば、神は私たちにみことばの真理を明らかにしてくださいます。

4 : 24, 25 量りのたとえ

このたとえでは、人はイエスを指し、量りは評価や判断を意味します。私たちのイエスに対する評価は、そのままイエスの私たちに対する評価となって返ってくるのです。即ち、イエスのみことばを聞くに値する価値あるものと評価して、信じ従うなら、イエスは私たちにみことばの真理を教え、救いの祝福を与え続けてくださいます。一方、イエスのことばを価値のないものと評価して、受け入れないならば、イエスもその人にはみことばの真理を教えず、救いの祝福を与えられません。それどころか、みことばを信じない人は、やがてみことばを聞く機会さえも失ってしまうのです。

4 : 26～29 成長する種のたとえ

イエスは、このたとえで神の国における救いの原則について教えられました。人の救いのために人間ができることは、みことばの種を蒔くことです。その後のことは、すべて神の働きによるのです。人がイエスを救い主と信じることは、救いの始まりであり、信仰の芽ばえです。これは、神の働きです。また、芽が成長し苗となり、次に穂となって実を結び、収穫を迎えること、即ち、信仰の成長も救いの完成もすべて神の働きです。神は私たちが福音を信じることができるように助けてくださり、信じた者がクリスチャンとして成長し、実を結ぶことができるように助けてくださいます。

4 : 30～34 からし種のたとえ

からし種は一番小さな種ですが、生長すると3mの高さになり、どんな野菜よりも大きくなります。同じように、私たちの信仰も最初は小さいものです。けれども、どんなに小さくても主イエスを信じる信仰を心に持つ時、神が私たちの信仰を成長させてくださり、神に祝福された人生を歩む者となることができます。たとえ、最初は小さな信仰であっても、イエスを信じる信仰を持つかどうか、やがて大きな違いを私たちの人生にもたらします。

4 : 35～41 嵐を静めるイエス

イエスと弟子たちは、その日の夕方、ガリラヤ湖の向こう岸へ渡るために舟に乗りました。ところが、しばらくすると激しい突風が起り、嵐となってしまいました。弟子たちの中には漁師もいましたが、彼らの経験ではどうすることもできない激しい嵐で、彼らは死の恐怖さえ覚えました。けれども、イエスだけは、とものほうで眠っておられたのです。弟子たちがイエスを起こすと、イエスは風や波を叱りつけられました。すると、風はやみ、大なぎになったのでした。弟子たちはそれを見て、大きな恐怖に包まれました。なぜなら、その時まで、イエスが自然界をも支配する全能の神であることを理解していなかったからです。イエスは、このような時こそ、ご自分に対する信仰が必要なことを教えられました。私たちの人生にもさまざまな嵐が突然やってくるがあります。そのような時こそ主イエスを信じ、イエスが嵐を静めてくださることを信じて、恐れずに歩む者となりましょう。

5 : 1～5 悪霊につかれた人

イエスがガリラヤ湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着くと、墓場に住む悪霊につかれた人がイエスを迎えました。彼は、自分で自分をコントロールできないみじめな状態であり、しかも、このみじめな状態から、だれも彼を救うことができませんでした。私たちは、一見すると彼と何の関係もないように思いますが、状況は違っても共通点があります。それは、私たちも自分で自分をコントロールできないみじめさを持っているということです。私たちは自分の感情や悪習慣や罪を正しくコントロールすることができず、むしろそれらに支配されてしまいます。これは、神から離れ、罪の支配の中にいる人間のみじめな状態です。しかも、このみじめな状態から、人は自分自身を救うことができないのです。

5 : 6～10 悪霊の支配とイエスの権威

悪霊は自分の名前はレギオンだと言いました。その意味は大ぜいであり、圧倒的な支配を意味していました。けれども、悪霊は、イエスが自分よりも圧倒的な権威と力を持つ、いと高き神の子であることを知っていました。ですから、イエスが悪霊にこの人から出て行けと命じられた時、悪霊はイエスの命令に従わなければならなかったのです。イエスは、このみじめな悪霊の支配の中にいたゲラサ人を救うためにこの地に来てくださいました。そして、イエスはまた、私たちを罪と悪魔の支配から救うためにこの世に来てくださったのです。

5 : 11～17 悪霊の働きとイエスの働き

悪霊は豚の大群に乗り移ることをイエスに願い、イエスはそれを許されました。すると、悪霊は豚の大群に乗り移り、豚は湖になだれ落ちておぼれてしまいました。豚の死は悪霊の働きであり、イエスは悪霊が豚に乗り移るのを許されただけでした。けれども、人々は豚の死をイエスのしわざと考え、イエスに立ち去ってほしいと願いました。悪霊の働きは破壊的であり、人の人格を支配し、人を罪と死に導きます。また、人を神から引き離します。一方、悪霊が出て行った時、彼は着物を着て正気に返って座っていました。イエスの働きは、悪霊と罪の支配から人を救い出し、新しい人に造り変え、神のもとに導きます。イエスだけが、人を悪霊と罪から救い出すことができるのです。

5 : 18～20 イエスに救われた人

イエスによって悪霊を追い出していただいた人は、救いの喜びに満たされて、イエスの弟子としてイエスにお供したいと願いました。けれども、イエスは彼に家に帰って、神の救いの恵みを伝えなさいと言われました。彼は、イエスに別れを告げると自分の郷里に帰り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを伝えました。彼は、デカポリス地方でイエスの救いの恵みを伝える人になったのです。聖書は言います。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」Ⅱコリント5:17 私たちもイエスを救い主と信じるなら、すべての罪が赦されて、悪魔の支配から神の支配に入れられて、永遠のいのちをいただき、救いの喜びに満ちた新しい人に変えられます。

5 : 21～24 ヤイロの信仰

イエスが舟から上がられると、会堂管理者ヤイロが来て、娘が死にかけているので、家に来て娘をいやしてくださいと一生懸命イエスに願いました。ヤイロは、イエスが自分の娘をいやすことができるお方だと信じたので、熱心にイエスに願ったのです。イエスは、ヤイロの信仰に応じて、ヤイロの家に向かいました。私たちがイエスを救い主と信じる時、イエスに熱心に祈る者とされます。そして、イエスは私たちの祈りを聞き、ご自分の時にご自分の方法によって、みこころにかなった答えを与えてくださいます。

5 : 25～29 女の信仰

12年間、長血をわずらっていた女がいました。彼女は、多くの医者からひどい目に会わされ、持ち物も使い果たし、病は悪くなるばかりでした。このような状況の中で、彼女はイエスのことを耳にしたのです。彼女は、イエスなら自分の病気を直してくださる、また着物にさわることでもできればきっと直ると信じました。そして、群衆に紛れ込み、後ろからイエスの着物にさわりました。すると、何とすぐに、彼女の病気がいやされたのです。信仰は聞くことから始まると聖書にありますが、彼女はイエスのことを聞いた時、イエスを信じてみもとに行ったので、イエスの救いのみわざを経験することができたのです。

5 : 30～34 公な信仰告白

イエスは、女が自分の着物をさわっていやされた時に、自分の内から力が出て行ったことに気づきました。そして、誰が着物にさわったのかと言って、見回し続けられました。女は恐れおののいて、イエスの前に出て、自分に起こったことを話しました。イエスは、彼女にご自分への信仰を公に告白する機会を与えられました。そのことによって、彼女はイエスと個人的な交わりを持つことができ、イエスの弟子となることができました。イエスは、今日も私たちに個人的な信仰を公に告白することを願っておられます。洗礼は、私たちの個人的な信仰を公に告白する機会として備えられています。

5 : 35～37 ただ信じていなさい

ヤイロは一刻も早くイエスを娘の所に連れて行きたかったのに、自分の思いどおりにできませんでした。そして、そうこうしている間に、娘の死を知らされたのです。ヤイロはどんなにつらく悲しい思いをしたことでしょう。けれども、イエスは、悲しむヤイロに対して、「恐れないで、ただ信じていなさい。」と言われました。ヤイロはイエスを信じ続け、家に向かいました。私たちが、自分の計画が崩れ去り、もうだめだと思う中でもイエスを信じるなら、そこから神のみわざが始まります。

5 : 38～43 タリタ・クミ

イエスは泣いている人々に、子供は死んだのではなく眠っているとされましたが、人々は信じずイエスをあざ笑いました。確かに子供は死んだのですが、イエスは子供が生き返ることを知っておられたので、眠っているとされたのです。そして、子供のところに行かれたイエスは、子供の手を取り、「タリタ・クミ(少女よ。あなたに言う。起きなさい。)」と言われました。すると、少女はすぐに生き返り、起き上がったのです。ヤイロはイエスを信じ続けたことによって、神のみわざを見ることができました。私たちがどんな状況の中でもイエスを信じ続けるなら、神のみわざを見ることができ

6 : 1 ~ 6 郷里での伝道

イエスは郷里のナザレに行き、安息日に会堂で教えられました。それを聞いた多くの人々は驚きました。けれども、人々の驚きはイエスに対する信仰にはつながらず、逆にイエスにつまずいたのです。ナザレの人たちは、イエスを子供の頃から知っていたので、イエスの人間としての面にこだわり、救い主として受け入れることができなかったのです。イエスは彼らの不信仰に驚かれ、そこでは救い主としての力あるわざを行うことができませんでした。私たちも、自分の考えや偏見にこだわると、イエスを救い主として信じることができません。聖書からイエスを知り、聖書が教えるとおりにイエスを信じるのが大切です。

6 : 7 ~ 13 弟子たちによる伝道

イエスは12弟子を伝道のために二人ずつ遣わされました。その時、イエスは杖一本以外は持っていないように、また一軒の家にとどまるようにと命じられました。これは、弟子たちが旅行中、主に信頼することを学ばせるためでした。弟子たちはこの伝道旅行で、主に信頼する者には、主がすべての必要を満たしてくださることを学ぶことができました。さらに、主に信頼した弟子たちは、福音を伝え、悪霊を追い出し、病人をいやすという力強い働きをすることができました。弟子たちに聞こうとしない人たちに対して足のちり払うとは、弟子たちは伝道の責任を果たしたので、結果は神にゆだねて、前に向かって進むようにとの主の励ましです。私たちも主イエスを信じる時に、主は私たちの必要を満たし、力を与えてくださることを知ることができます。

6 : 14 ~ 20 バプテスマのヨハネの伝道

イエスのうわさを聞いたヘロデ王は、自分が殺したバプテスマのヨハネが生き返ったのだと言いました。バプテスマのヨハネは、ヘロデ王が兄弟の妻を自分の妻としたことは不法であると、王に言い張りました。その結果、ヨハネは捕らえられ、牢に入れられました。ヨハネは、すべての人は自分の罪を悔い改めて、救い主を信じなければならないことを伝えました。そして、時の権力者である王に対しても、同じように罪の悔い改めを説いたのです。王は、ヨハネの話を聞いて好意を示し、ヨハネを保護しましたが、罪を悔い改めることはしませんでした。私たちも、みことばを聞いた時、ただ好意を示すだけではなく、信じて悔い改めるのが大切です。

6 : 21 ~ 29 バプテスマのヨハネの死とその意味

ヘロデ王は、自分の誕生日に、妻ヘロデヤの娘が踊った踊りを喜び、どんなほうびでも与えると言いました。少女は、母親の求めに応じて、王にバプテスマのヨハネの首を求めました。王は自分の誓いと人々の手前もあり断ることができず、求めに応じ、王の命令でヨハネは殺されました。こうして、ヨハネは無念の死を遂げたのですが、彼の死は決して空しいものではありませんでした。ヨハネはいのちをかけて、人々に神の前に罪を悔い改めるべきことを伝え、救い主イエスの道備えをする使命を果たしたのです。また、「主の聖徒たちの死は主の目に尊い。」(詩 116:15)とあるように、主はヨハネの働きをご存じで、天国において報いてくださいます。主に信頼する者は、どんな死に方であっても、必ず天国に行くことができるので、その死は空しくなく、主の目に尊いのです。

6 : 30 ~ 34 羊飼いのいない羊

伝道旅行から帰って来た弟子たちは、休息を取るために、舟に乗ってさびしい所へ向かいました。ところが、多くの人々が先回りしてイエスを迎えました。イエスは群衆が羊飼いのいない羊のようであるのを見て深くあわれみ、いろいろと教え始められました。聖書では、人間を羊に、神を羊飼いにたとえています。(詩篇23篇) 羊は弱い家畜で、羊飼いが養い、守り、導かないと生きていけません。人間も神から離れた結果、羊飼いのいない羊のようになってしまいました。イエスは、良い羊飼いとしてこの世に来て下さいました。(ヨハネ10:11) 良い羊飼いであるイエスは、私たちを罪と死と滅びから救い出し、私たちのたましいを養い、私たちを正しい道に導いてくださいます。

6 : 35 ~ 44 五千人の給食

このとき、男だけでも五千人の人がイエスのもとに集まっていました。弟子たちは、時間も遅くなったので、人々を解散させて、自分たちで食べ物を買うようにさせてくださいとイエスに言いました。ところが、イエスは弟子たちに、あなたがたで食べ物を準備するようにと言われました。弟子たちは二百デナリ(二百日分の賃金の金額)の食べ物を自分たちで買って、人々に食べさせることは難しいと考えました。けれども、イエスは五つのパンと二匹の魚を取って奇跡をおこない、人々が満腹になるまで食べさせました。イエスは、霊的必要だけでなく、肉体的必要も満たしてくださる羊飼いであることを、この奇跡によって示されました。イエスは、今も良い羊飼いとして、ご自分に信頼する者のすべての必要を満たしてくださいます。

6 : 45 ~ 52 湖を歩くイエス

イエスは、弟子たちを舟に乗せ、先に向こう岸に向かわせました。そして、一人で祈るために、イエスは山のほうに向かわれました。イエスは祈りによって、父なる神と交わり、みこころを確認し、新たな力を父なる神からいただきました。イエスのみわぎの背後には、日々の祈りがありました。さて、弟子たちの舟が向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になったイエスは、湖の上を歩いて彼らに近づかれました。それを見た弟子たちは、幽霊だと思いおびえました。けれども、イエスは、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われ、舟に乗り込まれると、風はやみしました。イエスは、今日も人生の向かい風で漕ぎあぐねる私たちの所に来てくださいます。イエスを信じ、心にお迎えする時に、私たちの心に吹く向かい風はやみ、イエスの平安をいただくことができます。

6 : 53 ~ 56 病人のいやし

舟がゲネサレの地に着くと、人々がイエスだと気づいて、病人を床に載せて連れてきました。彼らは、イエスが多くの病人をいやされたことを聞きました。そして、イエスは病気を直すことができるお方だと信じて、病人を連れて来たのでした。そして、せめて、イエスの着物にでもさわらせてほしいと願い、さわった人はみないやされました。ナザレの人たちは、不信仰のためにイエスに求めず、そこでは少数の病人しかいやされませんでした。「求めなさい。そうすれば与えられます。」とイエスが言われたように、主を信じ、主に求める者に、主は答えてくださいます。私たちも主を信じ、主に求め、主の祝福にあずかる者となりましょう。

7 : 1～5 きよめの儀式

エルサレムから来たパリサイ人たちは、イエスの弟子が、きよめの儀式にのっとり手を洗うことをせずに、パンを食べているのを見て、非難しました。パリサイ人が教えるきよめの儀式には、次のような意味がありました。まず、罪とは汚れたものに触れることであり、具体的には異邦人、罪人、汚れたものに触れる時、その人は罪に汚れてしまいます。そこで、外側に付いた罪の汚れを落とすために、きよめの儀式によって、手を洗い、食器を洗って、汚れが口に入らないようにしました。また、外出した時も、からだをきよめて外に付いた汚れを落としました。ユダヤ人は神に選ばれたきよい民なので、外側に付いた罪の汚れを落とせばきよくなると考えたのです。

7 : 6～8 人間の言い伝え

イエスは、イザヤ書のことばを引用し、パリサイ人は神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っていると言って非難されました。パリサイ人は聖書に教えられていない様々な規則を作り、それを守ることによって聖い生活をしようと考えました。その結果は、神の教えを捨てることになり、彼らの教えには熱心であっても、神から遠く離れる者になってしまいました。聖書は、ユダヤ人も異邦人もすべての人は神の前に罪人であると教えています。また、罪は人の心の中にあり、心の中から出て来るものであると教えています。そして、外面的なきよめの儀式ではなく、罪を悔い改めて、キリストを救い主と信じる信仰によって、罪の赦しときよめが与えられると教えています。

7 : 9～13 神のことばを空文とする

イエスは、パリサイ人が神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを守っている具体例として、コルバンの教えを挙げられました。聖書は、十戒で「あなたの父と母を敬え」と教えています。この教えは人間関係の基本となり、神を敬う信仰に子供を導く大切な教えです。ところが、パリサイ人は、神にささげられたものは人間のためには用いられないというコルバンの誓いをするならば、父母への責任を果たさなくてもよいと教えました。そのようにして、人間の言い伝えが神の教えに優先し、神のことばを空文にしていたのです。私たちも一見聖書に似ている教えであっても、実際に聖書の教えなのかどうかを、聖書からよく確かめて、聖書の教えに従うことが大切です。

7 : 14～19 外側から人に入るもの

イエスは、人間の罪と汚れは外面的なものではなく、内面的なものであることを教えられました。もし、罪や汚れが外側から人に入る外面的なものであれば、きよめの儀式をして食事をすればきよく、きよめの儀式をしなれば汚れることになるでしょう。日本でも、外面的なきよめの儀式として、お払いや塩をまくことをします。けれども、人の罪や汚れは人の心の内側にあるものなので、外面的な汚れを取り除くきよめの儀式では、人間はきよくなりません。イエスは、人の口から入るものは人を汚さないと言われて、すべての食物をきよいとされました。イエスは、この教えによって、旧約聖書レビ記 11 章に記されているきよい食べ物ときよくない食べ物の区別を撤廃され、何を食べてもよいことを教えられたのです。

7：20～23 人の心から出て来るもの

イエスは、罪は外側から人に入ってくるのではなく、人の心から出て来るものであると教えられました。「人の心」を「私の心」と置き換えてこの箇所を読み、同意することができるでしょうか。ここで問われているのは、実際の行いではなく、心の思いです。罪の思いは人の心の中にあり、それが言葉や行いとなって出て来るのです。では、どうして人の心には罪の思いがあるのでしょうか。それは、すべての人がまことの神に背を向けて、神から離れ、自分勝手に生きているからです。神にそむいて生きることが罪の本質なのです。そして、その罪の結果、人は様々な罪の思いを心に持つようになり、実際に行うようになったのです。人の罪が心の中にあるので、外側からの方法をもって罪をきよめることはできません。人の心をきよめることができるのは、救い主イエス・キリストだけです。私達がイエスを自分の救い主と信じ、心に受け入れるなら、イエスは十字架の贖いをもって、私達のすべての罪を赦し、きよめてくださいます。

7：24～30 スロ・フェニキアの女の信仰

イエスは、異邦人の地であるツロの地方に行かれました。すると、悪霊につかれた小さい娘のいる女が、イエスのもとに来てひれ伏しました。女はスロ・フェニキア生まれの異邦人でした。彼女は自分の娘から悪霊を追い出してくださるようにイエスに願い続けました。するとイエスは、「子供達(ユダヤ人)のパンを取り上げて、子犬(異邦人)に投げてやるのはよくないことです。」と言われ、冷たく女を突き放すような言葉をかけて、女の信仰を試されました。すると、女はあきらめずにへりくだって、「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の子犬でも、子供達のパンくずをいただきます。」とイエスに言いました。イエスは女の答えを聞き、「そうまで言うのですか。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました。」と言われました。女はイエスのことばを信じて家に帰ると、悪霊は娘からもう出ていました。女は、主のあわれみを求める謙遜な信仰と、あきらめずに求め続ける信仰と、イエスのみことばを信じる信仰を持っていました。イエスはその女の信仰に応じて、娘をいやされたのです。私達もそのような女の信仰を持って、イエスを信じていきましょう。

7：31～37 耳が聞こえず、口のきけない人をいやす

イエスがデカポリス地方に戻って来られると、人々が耳と口の不自由な人を連れて来て、彼を直してほしいと願いました。イエスはこの願いを聞かれました。そして、この人が単にいやされるだけでなく、イエスを個人的に知り、信じることができるように、特別な方法を取られました。まず、彼を群衆から連れ出し、彼の心をイエスに向けさせました。次に、耳と舌をさわることによって、イエスが彼をいやそうとしておられることを彼に伝えました。そして、天を見上げ「開け」と言われて、神の力によっていやすことを彼に伝えました。このようにして、イエスが彼をいやされた時、彼の肉体の耳と口が開かれただけでなく、彼の心の耳と口も開かれて、この人はイエスのみことばを聞き、イエスに感謝の言葉を語り、イエスを救い主と信じる者となったのです。私達もイエスを信じるまでは、心の耳と口が閉ざされて、神のことばが聞こえず、神に向かって話せない状態です。けれども、イエスはそのような私達をも個人的に取り扱ってくださり、イエスを信じるができるようにしてください。その時、私達の心の耳と口が開かれて、神のことばを聞いて信じ、神に祈り、感謝と賛美をささげる者に変えてくださるのです。

8 : 1 ~ 10 イエスのあわれみ

イエスは、群衆が食べる物がなく空腹であるのを見て、「かわいそうに」と言われました。イエスは、私達の欠乏、苦しみ、悲しみ、痛みを知って、私達のことをあわれんでくださるお方です。そして、親が子に語るように「かわいそうに」と言って、私達のことを心配し、みこころにとめてくださいます。さらに、イエスは私達をあわれむだけでなく、実際に助けてくださるお方です。弟子達の姿は、あわれみの心も人を助ける行動にも限界のある人間の姿を現しています。けれども、イエスは人をあわれむだけでなく、どんな困難で不可能と思われる状況の中でも、人を助け救うことができるお方です。この時も、7つのパンとわずかな魚で4千人の人を満腹させる奇跡を行われました。イエスはまた、罪人の私達を「かわいそうに」と言って深くあわれみ、私達を罪と滅びから救うために、ご自分のいのちを捨てて、私達のために救いの道を開いてくださいました。私達に「かわいそうに」と語られるイエスの招きを聞いて、イエスのもとに行くならば、イエスは私達を救い、おりにかなった助けをいつも与えてくださいます。

8 : 11 ~ 13 不信仰の根

パリサイ人たちがイエスのもとにやって来て、イエスに議論をしかけ、天からのしるしとしての奇跡を求めました。彼らは、イエスの話を聞きたいと願ったのではなく、イエスに対して最初から敵対心を持ち、イエスをおとしめるためにやって来たのでした。彼らは高慢でかたくなであり、たとえイエスが議論に応じて教え、奇跡を行ったとしても、信じないほどの不信仰の根がありました。イエスはそれを知っておられたので、議論に応じず、奇跡も行われませんでした。私たちも不信仰の根が心にある限り、どんなに頭で聖書を理解しようとしても理解できず、聖書の奇跡も否定することでしょう。不信仰の根には、人間の誇り、高慢があります。それが砕かれて謙遜にならなければ、イエスのみことばをすなおに聞き、受け入れることができません。水は高い所から低い所へと流れるように、イエスの救いは、イエスの前にへりくだる者の所に与えられるのです。

8 : 14 ~ 21 パン種論争

イエスは舟の中で、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」と弟子達に言われました。パン種とは彼らの教えのことで、パリサイ人のパン種とはユダヤ教の規則を守ることが第一とする律法主義の教えです。また、ヘロデ(バプテスマのヨハネを殺した王)のパン種とは、神を信じない世俗主義の教えであり、いずれもイエスを信じない教えです。パン種は、少しの量で粉のかたまり全体をふくらませるように、彼らの誤った教えが少しでも人の心に入ると、イエスの福音を徹底的に妨げるのです。ですから、弟子達もくれぐれも彼らの教えに気をつけるようにとイエスは教えられたのです。ところが、弟子達は、パンを持ってくるのを忘れたことをイエスに言われたのではないかと思い、互いに議論を始めました。弟子達はまだ信仰の理解力に欠け、イエスの教えがはっきりとわかっていませんでした。今日も、無神論、進化論、ヒューマニズム、宗教、習俗、異端の教えなど聖書の教えと異なったパン種があります。私達もそれらの教えに気をつけないと、福音と異なる教えに陥ってしまう危険性があります。

８：２２～２６ 盲人のいやし

イエスがベツサイダに着くと、人々が盲人を連れて来て、さわってやってほしいと願いました。イエスは盲人をあわれみ、彼の手を取って村の外に連れて行きました。イエスが一度目に、盲人の両眼につばきをつけて両手を当てられると、盲人はぼんやりと見えるようになりました。そして、二度目に彼の両眼に両手を当てられると、はっきりと見えるようになりました。彼は目が見えるようになった時、心の目も開かれて、イエスを救い主と信じることができたことでしょう。私たちも、最初は心の目が閉じていて、イエスがだれなのかについて全く見えない状態ですが、聖書を学んでいく中でぼんやりと見えるようになります。そして、イエスを救い主と信じる時に、私たちの心の目が開かれて、イエスを救い主としてはっきりと見えるようになります。

８：２７～３０ ペテロの信仰告白

イエスに対する様々なうわさがある中で、イエスは弟子達に、「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と尋ねられました。すると、ペテロが「あなたはキリストです。」と答えました。この答えこそイエスに対する正しい答えでした。キリストとは、油注がれた者という意味の言葉で、神が遣わされる救い主を意味する言葉でもありました。ペテロは、イエスは神が遣わされた救い主であると信じて答えたのです。イエスは今日も、私たち一人一人に、「あなたはわたしをだれだと言いますか。」と尋ねておられます。私たちもペテロのように、「あなたはキリストです」との信仰を告白する時に、神の救いをいただくことができます。

８：３１～３３ 第１回目の苦難の預言

ペテロは正しい信仰告白をしましたが、まだその意味を十分理解していませんでした。そこで、イエスはご自分がキリストであることの意味を教えられました。それは、イエスは、人々を罪から救うために、苦しみを受け、殺され、三日の後によみがえらなければならないということでした。イエスの受難と死と復活は、人類の救いを成し遂げるために、初めから計画されていたことでした。けれども、この時のペテロには理解できず、イエスをいさめ始めました。しかし、イエスは「下がれ。サタン。」と言ってペテロをしかられました。イエスの十字架は必要ないと言う者は、サタンの側に付くことになるのです。やがて、ペテロはイエスの受難と死と復活を目撃したときに、イエスがキリストであることの真の意味を悟り、イエスがキリストであるとの福音を宣べ伝えました。イエスは確かに私たちのために苦しみを受け、十字架で死に、三日目によみがえられたキリスト、救い主です。

８：３４～３８ イエスの弟子の道

イエスは人々にイエスの弟子になることの意味を教えられました。イエスの弟子の道は、まず自分の十字架を負う道です。自分の十字架とは、イエスを信じ従う中で受ける苦しみのことです。イエスを信じ、イエスに従う者には、すばらしい救いの祝福が与えられると共に、イエスの苦しみにもあずかります。また、イエスの弟子の道は、いのちを失って救う道です。イエスと福音とのためにいのちを失うとは、時には殉教をも意味しますが、それだけではなく、イエスのために自分のいのちを用いることであり、ささげることです。そのような生き方には永遠のいのちの祝福があります。また、どんな困難な時にも主の最善の助けが与えられます。

9：1～8 イエスの変貌

イエスはペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に登られました。その時、イエスの姿が変わり、神の御子としての栄光の姿を現されました。また、律法を代表するモーセと預言者を代表するエリヤが現れてイエスと語り合いました。二人はイエスがキリストであることを証したのです。ペテロは三人のために幕屋を三つ造りたいと言いました。その時、天から父なる神の声が聞こえました。「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。」イエスは父なる神の愛する御子であり、神は私たちにイエスに従うようにと命じておられます。イエスの栄光の姿はすぐにはなくなりましたが、やがてイエスは神の栄光を帯びて再臨されるのです。

9：9～13 イエスの死と復活

山を降りながら、イエスは弟子たちに、人の子が死人の中からよみがえるまでは、今見たことを誰にも話してはならないと命じられました。彼らはその命令を守りました。けれども、弟子たちはイエスの死と復活の意味がわからず、論じ合いました。イエスの栄光の姿をたった今見た弟子たちにとって、イエスが死ぬことなど考えられませんでした。そこで、彼らは話題をエリヤのことに切り替えました。律法学者は救い主の到来前に、エリヤが来ると教えていました。イエスは、エリヤはすでに来たと行って、それはバプテスマのヨハネであることを暗に示されました。イエスもヨハネのようにやがて殺されますが、イエスはよみがえられてご自分の栄光を現されます。

9：14～19 不信仰な世

イエスが山の下に待たせていた弟子達の所に帰って来ると、律法学者が弟子達と論じ合っていました。それは、弟子達が、口をきけなくする霊につかれた子供から悪霊を追い出すことができなかったのも、律法学者からイエスの権威について攻撃されていたのです。イエスはそれを知って、不信仰な世を嘆かれました。子供を連れて来た父親の不信仰、悪霊を追い出せない弟子達の不信仰、そしてイエスを信じない律法学者の不信仰がありました。不信仰ではなく、イエスを信じる者になりましょう。

9：20～27 悪霊を追い出すイエス

イエスは、その子をあわれんで、ご自分のもとに連れて来させました。父親はイエスに、「ただ、もし、できるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」と願いました。するとイエスは、「できるものなら、と言うのか。信じる者にはどんなことでもできるのです。」と言われました。イエスに自分の不信仰を示された父親は、「信じます。不信仰な私をお助けください。」と言いました。イエスは群衆の前で悪霊を追い出し、ご自分の権威を現されました。神の全能の力は、イエスを信じる者を通して現されます。

9：28～29 祈りの必要性

弟子達はイエスに、なぜ自分達には悪霊を追い出せなかったのかと尋ねました。するとイエスは言われました。「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」祈りのあるところには信仰があります。逆に、祈りのないところには不信仰が生じます。弟子達は祈らず、主の権威に全面的に頼る信仰に欠けた状態で、悪霊を追い出そうとしたので、できなかったのです。主の働きをするためには、祈りが不可欠なのです。「主よ。私達を祈りの人としてください。」

9：30～32 第2回目の苦難の預言

イエスは再び、ご自分の苦難を預言されました。しかし、群衆の中で、イエスの苦難と死と復活を理解できる人はだれもいませんでした。イエスは、そのような人々に囲まれる気になれませんでした。イエスは孤独でした。また、弟子達もイエスの苦難を理解できず、尋ねることも恐れしました。弟子達はなお、イエスが地上の王になることを期待していたのです。けれども、イエスの十字架の死と復活を理解することを避けるならば、福音を理解することはできず、イエスの本当の弟子になることはできません。イエスの死と復活こそ、福音の中心だからです。

9：33～37 みなに仕える者

弟子達は道々、イエスの苦難の話題を避け、だれが一番偉いかという議論に花を咲かせていました。イエスが弟子達に話題を聞かれた時、弟子達は恥ずかしくなって黙ってしまいました。イエスは弟子達に、みなに仕える者となることが、イエスの弟子の道であることを教えられました。そして、一人の子供を通して、みなに仕えるとはどのようなことかを教えられました。幼子をイエスと同じような存在として受け入れるには、徹底してへりくだらなければなりません。イエスは、徹底してへりくだられ、罪人の私達に仕え、私達のために死んでくださいました。

9：38～41 イエスの味方

ヨハネがイエスに、「先生の名を唱えて悪霊を追いつけている者を見ましたが、私達の仲間ではないので、やめさせました。」と誇らしげに報告しました。それに対してイエスは、「やめさせることはありません。…わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。」と言われ、弟子達の内にあ

る心の狭い仲間意識を戒められました。イエスの名のゆえに親切にしてくれる人には、それがどんなささいなことであっても神の報いがあるのです。

9：42～48 つまずきを取り除く

イエスは弟子達に、弱く小さい者をつまずかせてはいけないことを教えられました。私たちは弱い者に対して愛の配慮をもって接しなければなりません。さらに、私達は自分のうちから信仰のつまずきとなるものを、取り除かなければなりません。ここでのイエスの教えはたとえであり、文字通りに行うことを教えているではありません。どんな犠牲を払っても、永遠のいのちに入るためには、心の中や生活の中から、信仰のつまずきとなるものを取り除かなければならないということです。どんな犠牲を払っても、つまずきを取り除いて神の国に入るほうが、信仰につまずいてゲヘナに投げ入れられるより、私達にとって良いことだからです。

9：49～50 地の塩

私達にとって、信仰の試練は火のようにつらいものであっても、その火によって、私達はきよめられ、地の塩としての塩けが増し加えられます。キリスト者は地の塩であり、地の塩としての使命が与えられています。その使命とは、まず、この世の腐敗や墮落を食い止め、防止することです。また、人々の中に入って行き、福音を伝え、人々が救われて、地の塩に変えられることです。そのためには、私達は自分のうちにある信仰者としての塩けを保たなければなりません。そして、そのためには、この世と妥協することなく、神のみこころに従っていかなければなりません。それと同時に、この世から分離するのではなく、この世の人々と和合して暮らし、良き証しを立てることが大切です。

10 : 1～5 離婚は許されるか

パリサイ人がイエスをためすために、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問しました。イエスは逆に、モーセは何と命じているかと尋ねられると、パリサイ人は、「モーセは離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」と答えました。(申命 24 : 1) 当時は、この聖書のことばをもって、安易に妻と離別する夫が多くいたのです。それに対してイエスは、モーセは人々の心がたくななので、離婚状の制度を定めたのであって、積極的に離婚を勧めたり、命じたりしているのではないことを教えられました。そして、離婚の問題は、結婚制度の原点に立ち返って考えるべきことを教えられました。

10 : 6～12 結婚制度

結婚制度は、人を男女に造られた神が作られました。結婚とは、親から独立した二人の男女が夫婦として結ばれ一心同体となることです。結婚した夫婦は、社会的、経済的、精神的、肉体的、靈的に一つとされ、共に助け合い、支え合って家庭を築いていきます。しかも、二人を夫婦として結び合わせたのは神ご自身です。ですから、人は神が結び合わせた夫婦を引き離してはいけません。この結婚制度を考える時、安易な離婚は許されません。離婚は、人間の心がたくななため、どうしても結婚状態にとどまることのできない場合のきわめて例外的な措置であるということです。

10 : 13～16 子供のように

人々が、イエスに祝福していただくために子供達を連れて来た時、弟子達は彼らをしかりました。弟子達は、子供にはイエスに時間を取ってもらう価値がないと考えたのです。イエスは、それをご覧になって憤られ、「子供達をわたしのところに來させなさい。神の国はこのような者たちのものです。子供のように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできません。」と言われました。そして、イエスは子供たちを抱いて祝福されました。「子供のように」とは、すなおに受け入れる心、信頼する心、また謙遜な心を持つということです。そのような心をもってイエスを信じ受け入れる者は、神の国に入ることができるのです。

10 : 17～22 富める人

一人の人がイエスに、永遠のいのちを得るためには何をしたらよいかと尋ねました。この人は、良い行いによって、永遠のいのちを得ることができると考えていました。イエスが十戒の中の人間関係の教えである第5～10戒を示されると、彼はそのようなことはみな、小さい時から守っていると答えました。この人は、自分が神の前に律法を完全に守ることができない罪人であることがわかっていませんでした。イエスは、彼のうちにある罪を示すために、持ち物売り払って貧しい人に与えるようにと言われました。イエスはこのように言って、彼にとって富が神に代わる偶像となっていたことを示されたのです。すると、この富める人は、イエスのもとから悲しみながら去って行きました。人は行いによっては救われません。神の前に、自分が罪人であることを認め、悔い改めて、イエスを神の御子キリストと信じることによってのみ、人は救われるのです。

10 : 23～27 人にはできないが神にはできる

イエスが、裕福な者が神の国に入ることのむずかしさを語られると、弟子達は驚きました。すると、イエスはさらに、「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」と言われました。弟子達はますます驚き、「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」と互いに言いました。「らくだが針の穴を通る」とは、およそ不可能なことを表す当時の表現です。イエスは弟子達に、救いは人の努力や行いによってはできないことであるが、神にはできると言われました。人間の救いは、ただ神の救いのみわざによってのみ可能なのです。

10:28~31 イエスに従う

富める人は、神よりも富のほうが大切だと考え、イエスに従いませんでした。一方、弟子達は何もかも捨ててイエスに従って来たことを思い出し、イエスにそのことを伝えました。イエスは弟子達に、犠牲を払ってイエスに従う者は、この世では百倍の祝福を受け、後の世では永遠のいのちを受けると言われました。イエスに従う時には、様々な犠牲を払うことがあります。けれども、神は私達の犠牲にまさる祝福を与えてくださるのです。けれども、犠牲を払って主に従うことも、自分の力で行えることではなく、ただ神の恵みです。その神の恵みを忘れて、自分を誇るなら、その人の信仰も弟子としての献身も後退することになります。

10:32~34 第3回目の苦難の預言

イエスは、二度と戻ることのないエルサレムへの道先頭に立って進まれました。エルサレムにはイエスに激しく敵対している宗教指導者達がいるので、弟子達は驚き恐れつつ、あとについて行きました。すると、イエスは弟子達に、これからエルサレムで起こることを告げられました。イエスは宗教指導者達に引き渡され、彼らはイエスを死刑に定め、異邦人に引き渡されます。そして、彼らはイエスをあざけり、むち打ち、ついに殺します。しかし、イエスは3日の後によみがえります。イエスの苦難の預言は、これで3回目となりました。イエスは、私達を罪と滅びから救うために、十字架に向かって進んで行かれたのです。

10:35~40 弟子達の願い

弟子達は、何度イエスの苦難と死と復活の預言を聞かされても、理解できませんでした。それは、人間の知恵では理解できず、神の恵みによって、私達の心が開かれて初めてわかることなのです。この時、弟子達はむしろ人間的な栄光を求めました。ヤコブとヨハネは、イエスがエルサレムでこの世の王になると考え、その時には右大臣、左大臣にしてほしいと願いました。イエスは二人に、ご自分が受ける苦しみを共に受けることができるかと尋ねられると、彼らはできますと答えました。確かに後に、二人はイエスのために苦しみを受けますが、彼らはこの時、イエスの十字架の苦しみを理解したではありませんでした。また、栄光の座に着くことは、父なる神がお決めになることです。

10:41~45 贖いの代価

十人の弟子達は、ヤコブとヨハネが栄光の座を求めたことを聞いて腹を立てました。12弟子のどれもイエスの十字架の苦しみを理解していませんでした。イエスは、そのような弟子達に、弟子としての生き方を教えられました。それは、この世の支配者のように、人々を支配し、権力をふるうのではなく、みなに仕える者となることです。みなに仕え、みなの上になる者が、神の国では偉い人、上に立つ人のなのです。それは、イエスご自身が歩まれた道です。イエスは主なる神なのに、人々に仕え、最後には多くの人のための贖いの代価として、ご自分のいのちを与えてくださいました。贖いとは、代価を払って買い戻すことです。イエスは、私達を罪の中から救い出し、神の民とするために、ご自分のいのちを贖いの代価として支払ってくださったのです。

10:46~52 信仰による救い

イエスはエルサレムに向かう途中、エリコの町を通られました。そこに、バルテマイという盲人の物ごいが道ばたにすわっていました。彼はイエスのことをすでに聞いていました。そのイエスが道を通っておられると聞き、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください。」と叫び始めました。人々は彼を黙らせようとしたのですが、彼は叫び続け、イエスは彼を呼んで来るようにと言われました。そして、「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」とイエスが言われると、彼は見えるようになりました。そして、彼はイエスに従ったのです。イエスは、バルテマイの信仰を通して、目のいやしだけでなく、魂の救いも与え、彼はイエスの弟子とされました。

11:1~6 主がお入用なのです

イエスはエルサレムの近くに来た時、二人の弟子達にこう言われました。「向こうの村に行くと、だれも乗ったことのないろばの子がつながれているので、それをほどいて引いて来なさい。もし、『なぜそんなことをするのか。』という人がいれば、『主がお入用なのです。すぐにまた送り返されます。』と言いなさい。」弟子達がイエスに従って出かけると、すべてイエスの言われたとおりにになりました。私達もみことばに従って行く時、みことばの真実さを経験することができます。また、イエスのろばの持ち主は、「主がお入用なのです。」とのことばに応答して、ろばをイエスのために差し出しました。私達も「主がお入用なのです。」と言われたなら、喜んで私達の賜物や持ち物、そして私達自身を主に用いていただく者になりたいと願います。主に用いられることは、私達にとって素晴らしいことです。

11:7~11 エルサレム入城

イエスはろばの子に乗ってエルサレムに入城されました。これはゼカリヤ書9:9の「見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和でろばに乗られる。それも雌ろばの子の子ろばに。」という預言の成就となりました。人々は上着や木の葉を道に敷き、「ホサナ。祝福あれ。」と熱狂的にイエスを歓迎しました。人々はイエスがエルサレムで王となり、イスラエルをローマ帝国から救い出してくれることを期待したのです。けれども、イエスは地上の王となるためではなく、人類を罪から救うために十字架で死ぬために、エルサレムに入城されたのでした。イエスの十字架の意味を本当に知る時に、私達は真の意味で、ホサナと主をほめたたえることができます。

11:12~14 のろわれたいちじくの木

イエスは夕方にはベタニヤに行き、翌朝またエルサレムに行かれました。その途中、葉の茂ったいちじくの木がありました。けれども、その木には実がありませんでした。イエスはその木に向かって、「今後、いつまでもだれもおまえの実を食べることのないように。」と木をのろわれました。そして、翌朝、そのいちじくの木は枯れていました。(11:20) 旧約聖書においていちじくの木は、イスラエルの民にたとえられていました。葉は茂っても実のないいちじくの木は、当時のイスラエルの霊的な姿を象徴していました。どんなに外面的に律法や宗教儀式に熱心であったも、内側はイエスを十字架につけるほど、神への反逆に満ちていました。イエスはいちじくの木を枯らすことによって、このままではやがて神のさばきがイスラエルに下ると警告されたのでした。

11:15~18 宮きよめ

イエスが神殿に入られると、そこで商売をしていた人々を追い出し、両替人の台や商売人の腰かけを倒し、宮きよめを行われました。当時、宮では礼拝者の便宜をはかって、いけにえのための動物を売り、神殿で用いる貨幣の両替がなされていました。けれども、商売人達は、礼拝よりも金儲けのために商売をし、祭司長達も宮での商売の権利を握りしめ、彼らは礼拝を通して多くの利益を得ていたのです。まさに、神殿は礼拝の場ではなく、強盗の巣になっていました。イエスはそのことを知り、「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。」とのイザヤ56:7のみことばを示して、宮きよめが必要であったことを教えられました。しかし、祭司長達は、イエスを殺す相談を始めたのでした。彼らはイエスの聖なる怒りを理解できませんでした。彼らは、葉は茂っても実のないいちじくの木だったのです。

11:19～25 実を結ぶ者となるために

枯れたいちじくの木は、イエスの弟子達に対する忠告でもありました。イエスは、弟子達が神に喜ばれる実を結ぶ者となるためには、3つのことが必要であると教えられました。第1は信仰です。「神を信じなさい。」疑わずに、すなおに、天の父なる神に信頼する信仰こそ、弟子達に必要なものです。神は私達の信仰に応じて、困難な山をも動かし、不可能を可能にしてくれます。第2は祈りです。信仰と祈りは表裏一体です。私達が、祈ったことをすでに受けたと信じるなら、神はその祈りを現実のものとしてくれます。第3は赦しです。神のみこころは、神に赦された者が人を赦す者となることです。神に祈る者は、自分が神に赦されていることをいつも覚え、人を赦す者となるべきです。イエスはこのように、私達の信仰と祈りと生活の3つが一致する時に、実を結ぶ人生を歩むことができると教えられました。

11:27～30 何の権威によって

祭司長達は、イエスが、神殿での権威を持つ自分達を認めずに、宮きよめを行い、宮を混乱させたことに対して、怒りを持っていました。そこで、彼らはイエスに、「何の権威によって、これらのことをしているのか。」と尋ねました。それに対して、イエスは彼らの真意を明らかにするために、直接には答えず、次の質問を返しました。「バプテスマのヨハネは天から来たか、人から来たか。」この質問によって、祭司長達に、神からの権威をすなおに認める心があるのかを問われたのです。ヨハネは、救い主の道備えをするために神から遣わされた預言者であり、イエスは救い主であると証言した人です。ヨハネに与えられた神の権威を認めるなら、イエスを救い主と認め、イエスのうちにある神の権威も認めることになるのです。

11:31～33 神からの権威

祭司長達は、バプテスマのヨハネが神からの権威によって働いたことを認めず、彼を信じませんでした。ですから、ヨハネが天から来たと言え、なぜ彼を信じなかったのかと言われてしまいます。一方、群衆の多くはバプテスマのヨハネを神の預言者と信じていたので、祭司長達は群衆を恐れて、ヨハネは人から来たと言うこともできませんでした。結局、彼らはイエスに「わかりません。」と答えました。祭司長達は、自分達の権威を脅かす者をすべて認めない生き方をしていました。その結果、ヨハネもイエスも信じ受け入れることができなかったのです。イエスは、彼らのご自分のうちにある神の権威を認めないのを知って、「わたしも何の権威によってこれらのことをするのか話すまい。」と言われました。罪とは、神の権威を認めず、神を無視し、神が遣わされたイエスを信じないことです。私達は、信じない者にならないで、信じる者になりましょう。

12:1～5 ぶどう園のたとえ

イエスは、ぶどう園のたとえをもって、祭司長達がイエスを殺そうとしている罪の大きさを指摘されました。このたとえでは、主人は主なる神、ぶどう園はイスラエル、農夫はイスラエルの指導者、しもべは預言者、主人の息子はイエスをそれぞれ指しています。主人はぶどう園を造り、それを農夫たちに貸して旅に出ました。そして主人は、収穫の分け前を受け取りに、しもべたちをたびたび遣わしました。ところが、農夫達はしもべたちをはずかしめて、殺しました。このたとえのように、神は、イスラエルが神のみこころを行う民となるために、預言者をたびたび遣わして、神のみこころを伝えました。けれども、イスラエルの指導者は預言者を迫害し、殺して、神に逆らいました。

12:6～9 愛する息子

主人は、最後に愛する息子を農夫達のところに遣わしました。すると農夫達は、「あれを殺せば、財産はこちらのものだ。」と言って彼を殺しました。主人はそれを知ると、戻って来て、農夫達を打ち滅ぼし、他の人に与えてしまいます。このたとえのように、祭司長達はイエスを殺す計画を立て、やがて実行します。イエスは、ご自分が彼らによって殺されることを預言されたのです。そして、イエスを殺す罪の大きさと、それに対する神のさばきを警告されました。彼らは、神が造られた世界から、神を締め出し、自分達が神の座について、自分達が支配者となろうとしたのです。そして、そのために預言者達を殺し、ついにはイエスをも殺すのです。これが神に敵対する人間の罪なのです。

12:10～12 礎の石

父なる神は、人々が神の愛するひとり子イエスを殺すことを予想できなかったわけではありません。では、なぜ神はイエスをこの世に遣わされたのでしょうか。それは神の救いの計画を成し遂げるためでした。「家を建てる者達の見捨てた石、それが礎の石となった。」というみことばが成就するためでした。イエスは人々から見捨てられ、十字架で殺されました。けれども、イエスはその死によって、罪の贖いを成し遂げてよみがえられ、救いの礎とされました。そして、神はイエスを信じる者を救われるのです。「これは主のなさったことだ。私達の目には、不思議なことである。」のみことばとおりです。私達は、主のなさった救いのみわざを信じ、イエスを信じて神の救いをいただきましょう。

12:13～14 パリサイ人とヘロデ党のわな

イエスをわなに陥れようとして、パリサイ人とヘロデ党の人達がやってきました。パリサイ人は反ローマ派であり、納税には反対でした。一方、ヘロデ党は親ローマ派で、納税に賛成していました。この立場の違う者同士が、イエスを陥れるために協力しました。彼らはまずイエスを称賛しました。彼らが本心からこのことを言えたならば、どんなにすばらしかったでしょう。イエスは本当に、真理に基づいて神の道を教える真実な方です。次に、カイザルに納税すべきかどうかと質問しました。この質問にはわながありました。イエスが「はい」と答えれば、パリサイ人はイエスが律法に従っていないと訴えることができ、「いいえ」と答えれば、ヘロデ党がイエスはローマの反逆者だと訴えることができたのです。

12:15～17 イエスの答え

イエスはデナリ銀貨を見せて、「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」と尋ねられました。彼らが「カイザルのです。」と答えると、イエスは「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして、神のものは神に返しなさい。」と言われました。彼らはイエスの答えに驚嘆しました。神はこの世界の主権者です。その神が、この世の権威者を立て、国を治めることを許しておられるのです。ですから、人は神に従うべきであり、同時にこの世の国に対する義務も果たすべきなのです。けれども、もし地上の国が神に敵対するならば、私達は、国ではなく神に従うべきなのです。

12:18～23 復活を信じないサドカイ人

サドカイ人とは、サドカイ派に属する上流階級の祭司達のことであり、宗教と政治の指導者でした。彼らはモーセ五書を重んじ、そこに直接書かれていない復活を否定していました。彼らは、イエスに申命記25:5、6の教えをもって復活の教えの間違いを示し、イエスに恥をかかせようとし、次の話をしました。7人の兄弟が、長男の名を継がせるために長男の妻と結婚したが、みな子を残さずに死に、最後にその女も死んだ場合、復活の時にはその女はどれの妻になるのかと問いました。

12:24～27 サドカイ人の思い違い

これに対してイエスは、サドカイ人が聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのだと言われ、二つのことを教えられました。一つは、復活の時は地上の生活の延長ではなく、結婚もなく、天使のようになるということです。もう一つは、彼らが信じるモーセ五書が復活を教えていることです。神はモーセにアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神として現れました。(出エジプト3:6)神は生きている者の神であるので、3人の肉体は死んだが、たましいは天国で生きていることを意味しており、彼らは世の終わりの肉体の復活を待っていると教えられたのです。人間の救いは、たましいと体が一つとなって、神の国に入ることなのです。永遠のいのちと復活は切り離せないのです。

12:28～34 一番大切な命令

ひとりの律法学者が、聖書の中でどれが一番大切な命令ですかとイエスに尋ねました。イエスは一番大切な命令は、「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」(申命6:5)だと教えられました。神を愛するとは神を信じ、神を礼拝し、神のみこころに従って生きることです。また次に、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(レビ19:18)も大切な命令だと教えられました。神への愛と人への愛は、切り離すことのできない聖書全体を要約した教えなのです。イエスは、ご自分の教えをすなおに受け入れた律法学者は、神の国から遠くないと言われました。みことばを信じ、イエスを救い主と受け入れる者は、神の国に入ることができます。

12:35～37 キリストは主

律法学者達は、キリストをダビデの子と呼びました。確かに聖書は、キリストは人間としてはダビデの子孫として生まれると預言しています。けれどもイエスは、ダビデは聖霊によってキリストを主と呼んでいると教えられました。(詩篇110:1)聖書は、キリストはまことの人であると共にまことの神であると教えているのです。キリストが神の右の座に着くとは、キリストは神と同等のお方という意味であり、そこには、キリストの受肉、死、復活、昇天、再臨が預言されています。しかも、ダビデは聖霊によって、キリストを「私の主」と呼んだのです。私達もキリストを「私の主」と信じる時に、キリストの救いをいただくことができます。

12:38～40 律法学者の偽善

イエスは、律法学者達が人前では敬虔に振る舞い、信仰的に生きている姿を見せているが、内側は偽善に満ちていることを教えられました。そして、こういう人は、人一倍厳しい罰を受けると言われました。私たちにとって大切なのは、人の目ではなく神の目、人の称賛ではなく神の称賛、人の評価ではなく神の評価です。うわべではなく中身が大切なのです。

12:41～44 レプタ2枚の価値

イエスは、多くの金持ちが大金を献金箱に投げ入れ、その後に貧しいやもめがレプタ銅貨2枚を投げ入れるのを見られました。そして、この貧しいやもめが一番多く献金したと言われたのです。なぜなら、みなはあり余る中から投げ入れたのに、彼女はあるものすべてを投げ入れたからです。イエスは私達の心を見ておられ、神を愛する者を知っておられるのです。

13：1～4 神殿崩壊の預言

弟子の一人がエルサレム神殿のすばらしさに感激し、そのことをイエスに語りました。当時の神殿はヘロデ大王が着工し、46年たってもまだ完成しないほど壮大なスケールの見事な建物でした。けれどもイエスは、この神殿は崩壊すると預言されました。このことは、AD70年にローマ軍がエルサレムを攻撃し、神殿を破壊したことによって成就しました。しかし、弟子達はまだそのようなことが起こることは知りません。けれども、イエスの預言に並々ならぬものを感じ、4人の弟子がひそかに事の詳細をイエスに尋ねました。

13：5～8 終末の前兆

イエスは弟子達の問いに対して、AD70年の神殿崩壊と世の終わりをだぶらせて、終末の前兆を教えられました。第1の前兆は偽キリストの出現です。自分がキリストだと言う人が多く現れ、人々を惑わせます。第2は戦争や戦争のうわさを聞くことです。国家間の戦争や多国間での戦争が起こります。第3は民族間、国家間の敵対心と争いです。民族主義やナショナリズムが台頭し、争いが起こります。第4は方々に地震やききんが起こることです。

13：5～8 終末の前兆に対する態度

イエスはこれらの終末の前兆が起きた時、どのような態度を持って対応すべきかも教えられました。偽キリストの出現に対しては、人に惑わされないように気をつけることです。そのためには、聖書から救いの計画の全体をよく知っておくことが大切です。また、戦争や戦争のうわさを聞いてもあわててはいけません。まだ終わりが来たのではないからです。また、これらの前兆は、産みの苦しみの初めであることを知らなければなりません。産みの苦しみの後には、出産の喜びがあるように、終末の苦しみの後には、神の国の完成という確かな喜びがあるのです。ですから、私達はイエスを主と信じ、神に信頼して、落ち着いて、希望を持って歩むことが大切です。

13：9～13 迫害と宣教

第5の終末の前兆は迫害です。信仰のゆえにクリスチャンは迫害を受け、公けの場でさばかれ、また、家族からも迫害を受けます。けれども、迫害には世界宣教という目的が伴っています。迫害の中で、クリスチャンは福音をすべての民族に伝えるチャンスが与えられるのです。実際、使徒の働きにおいても、エルサレムでの迫害によって、福音はユダヤ、サマリヤ、異邦人へと伝えられました。また、キリスト教2000年の歴史の中で、殉教者の血は決して無駄にはならず、福音は伝えられていったのです。迫害下での伝道は聖霊のみわざであり、聖霊が何を語るべきかを教えてくださいます。迫害下でも、聖霊に助けられて最後まで耐え忍ぶ者は、救いの完成にあずかるのです。

13：14～20 荒らす憎むべきもの

第6の前兆は「荒らす憎むべきもの」の出現です。この預言はダニエル9：27等に記されており、BC167年に神殿を冒瀆したエピファネスという異邦人支配者において、まず成就しました。イエスはこの預言は、AD70年にローマ軍によるエルサレム崩壊の出来事と、終末における反キリストの出現(黙示11：7)をも指していると教えられました。けれども、主はそのような苦難の時にも、ご自分の民を守ってくださると約束されました。実際、ローマ軍のエルサレム進攻の際には、クリスチャンたちはみことばに従い、エルサレムを離れ山に逃げて助かったのです。そして、やがて黙示録で獣と呼ばれる反キリストが出現して苦難の時が来ても、主はご自分の民を守って下さるのです。ですから、私達はいつでも希望を持ち、忍耐して、主に信頼して歩んでいきましょう。

13：21～23 にせキリストとにせ預言者

第7の終末の前兆はにせキリストとにせ預言者の出現です。彼らは、しるしや不思議を行って、クリスチャンをも惑わそうとします。彼らの背後にはサタンがいます。サタンにとっては、奇跡を行うことは簡単なことです。ですから、「キリストがここにいる。あそこにいる。」と聞いても、だまされないように気を付けなければなりません。私達は、聖書によって、まことの神と救い主イエスを知り、神の救いのご計画の全体を良く知っていることが大切です。「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。」Ⅰヨハネ4：2

13：24～27 キリストの再臨

キリストの再臨の直前に、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象が揺り動かされます。そして、その後で、キリストが偉大な力と栄光を帯びて、雲に乗って天から来られます。そのとき、すべての人が栄光に満ちた再臨のキリストを見るのです。そして、キリストはご自分のすべての民を集められます。キリストにあって死んだ者は栄光のからだに復活し、生きているクリスチャンはそのまま天に引き上げられます。キリストの再臨を、希望をもって迎えるために必要なことは、私たちがキリストを自分の救い主と信じて、キリストの救いをいただくことです。そうすれば、キリストの再臨の時も、あるいは私達が死ぬ時も、天国に行く確かな希望を持つことができます。

13：28～32 いちじくの木のとえ

いちじくの木は、葉が出て来ると夏が近いことがわかります。同じように、キリストが教えられた終末の前兆が現れたら、キリストの再臨が近いことを知ることができます。キリストの再臨の日は父なる神だけがご存じです。ですから、人間が再臨の日を予告することは間違っています。キリストが再臨されると、天地は滅びます。もし、私達がこの世に希望を置いているならば、私達も滅んでしまいます。けれども、決して滅びることのない神のこばを信じ、キリストを救い主と信じるならば、私達は滅びることなく、永遠のいのちの祝福にあずかることができます。「この天地は滅びます。しかし、わたしのこばは決して滅びることがありません。」

13：33～37 主人を待つしもべのとえ

キリストの再臨の時は、ちょうど旅に出た主人の帰りを待つしもべのようです。主人がいつ帰って来るかわからないので、しもべたちは、主人が帰って来た時に眠っているのを見られないように、目を覚まして、与えられた仕事に励んでいなければなりません。同じように、私達も終末の前兆によって、再臨が近いとわかって、その日がいつかわからないので、気をつけ、目を覚まし、注意していなければなりません。まず、にせキリストや預言者たちにだまされないように気をつけていなければなりません。また、何よりもイエスを救い主と信じて、霊の目を覚まし、主の再臨を待ち望まなければなりません。そして、終末の前兆に注意しつつ、主イエスがいつ来られてもよいように、日々の務めを果たす忠実なしもべとなることが大切です。「しかり。わたしはすぐに来る。アーメン。主イエスよ。来てください。」黙示22：20

14 : 1～5 ナルドの香油

過越の祭りが二日後に迫っていた時、祭司長達はイエスを捕えて殺す方法を話し合っていました。このような中で、きらりと輝く出来事がありました。イエスが食卓に着いておられる時、ひとりの女が、純粋で非常に高価なナルド油の壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだのです。この女がマリヤであったことがヨハネ12:3に記されています。マリヤはナルドの香油をイエスの頭に注ぐことによって、イエスに対する純粋な愛と献身を現したのです。けれども、弟子達はこの彼女の行為に憤慨し、なぜ香油をむだにしたのかと言って厳しく責めました。弟子達には、彼女の行為の価値がわからなかったのです。

14 : 6～9 埋葬の準備

弟子達とは異なり、イエスはマリヤの行為を高く評価されました。まず、「わたしのために、りっぱなことをしてくれました。」と言って、マリヤの愛のささげものを受け入れられました。次に、「この女は、自分にできることをしたのです。」と言って、自分にできる精一杯のことをした彼女をほめられました。さらに、「埋葬の用意」をしてくれたと言って、彼女の行為には、イエスの埋葬の用意という深い意味があることを告げられました。そして、この出来事は世界中で「この人の記念となるでしょう。」と言われ、この出来事の価値の大きさを告げられました。私達も人の評価ではなく、神の評価を期待して、主のために自分にできることを精一杯行う人生を歩みましょう。

14 : 10～11 ユダの裏切り

イスカリオテ・ユダは、イエスを売ろうとして祭司長達の所に行きました。弟子達の会計係をしていたユダは、金銭を愛し、今までも金を盗んでいましたが、ついにイエスを売り渡すことを決めたのです。祭司長達はこれを聞いて喜び金をやろうと約束し、銀貨30枚をユダに支払いました。(マタイ26:15) ユダの裏切りによって、祭司長達は祭りの間にイエスを捕らえることができたのです。ユダはその後、イエスを引き渡す機会をねらいました。ユダは、もはやイエスを愛し、イエスに従う心を失ってしまいました。

14 : 12～16 過越の食事の準備

過越の祭りを迎え、弟子達はイエスに、どこで過越の食事の準備をしたらいいかと尋ねました。過越の祭りでは、まず過越の小羊をほふって食べ、その後の1週間は種なしパンを食べて出エジプトの出来事を祝います。イエスは弟子達に、都に入ると水がめを運んでいる男と会うから、その人が入って行く家の主人に、過越の食事をする部屋をイエスが探していると言いなさい。そうすれば、主人は二階の広間を見せてくれるから、そこで準備をしろと言いました。弟子達が行くと、イエスの言ったとおりになり、彼らはそこで過越の食事の準備をしました。同じように、神はこの時、私達のために、新しい過越であるイエスの死による救いを準備してくださっていました。

14 : 17～21 裏切る者への警告

過越の食事をしている時、イエスは弟子達のうちの一人が自分を裏切ると言われました。弟子達は悲しくなり、「まさか私ではないでしょうね。」とかわるがわる言いました。その中にはユダもいました。イエスは、弟子の裏切りによってご自分が死ぬことを語られ、さらにイエスを裏切る者は神のさばきを受けるので、生まれてこなかった方がよかったとまで言って、厳しくその罪を指摘されました。これはユダに悔い改めの機会を与えるための警告でした。しかし、ユダはイエスの警告を聞かず、イエスを裏切り、祭司長達の所に行ったのです。

14：22～25 最後の晩餐

十字架につけられる前夜、イエスが弟子達と取られた過越の食事を最後の晩餐と呼びます。イエスはこの時、聖餐式を定められました。聖餐式のパンは十字架で裂かれたイエスのからだを表し、ぶどう酒は十字架で流されたイエスの血を表します。イエスは人類の罪のために、身代わりに神のさばきを受けて死なれました。イエスの死によって、罪の贖いが成し遂げられ、イエスを救い主と信じる者の罪が赦されるという新しい救いの契約が備えられました。イエスを救い主と信じて洗礼を受けた人は、聖餐にあずかることができます。そして、十字架の救いを生涯感謝して歩みます。

14：26～31 イエスの預言

食事の後、イエスは弟子達とエルサレムの東隣りのオリーブ山に行かれ、そこで二つのことを預言されました。一つはご自分の死と復活の預言です。イエスは良い羊飼いとして、羊のためにいのちを捨てられます。(ヨハネ 10:11)しかし、イエスはよみがえって弟子達とガリラヤで会われます。もう一つは弟子達のつまずきの預言です。イエスが捕らえられると、羊である弟子達はつまずき、散り散りになります。ペテロは、自分は決してつまずかないし、イエスを否定しないといい、他の弟子達もそう言いましたが、イエスの預言どおりに、その夜弟子達はつまずいてしまいます。

14：32～34 ゲッセマネの祈り

イエスはオリーブ山のゲッセマネの園に行き、十字架を前にして特別な祈りの時を持たれました。この時、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人を連れて行き、ご自分の苦しい思いを理解して、共に祈ってほしいと願われました。イエスは、深くもだえ始め、悲しみのあまり死ぬほどの思いになられて、地面にひれ伏して祈られました。イエスの心の葛藤の大きさが、祈る姿に現れました。

14：35～36 イエスの祈り

イエスは「アバ、父よ」と父なる神に全幅の信頼をもって祈られました。イエスの祈りは二つに分けることができます。一つは、「どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。」という祈りです。「この杯」とは、イエスが負う十字架のことです。人類の罪のために神のさばきを受け、父なる神から見捨てられて死ぬことを覚え、イエスは苦しんで自分の思いを神に訴えたのです。私達はこの祈りを通して、イエスが負われる十字架がどんなに苦しいものであるかを知ることができます。二つ目は、「しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままをなさってください。」という祈りです。イエスは苦しみの中で、自分の願いを神にゆだね、父なる神のみこころに従われました。私達も自分の願いを率直に祈りつつ、その願いを神にゆだね、みこころになりますようにと祈ることが大切です。

14：37～42 眠る弟子達

イエスは1時間ほど苦しみながら祈られた後、3人の弟子達の所に来ると、彼らは眠っていました。イエスは、「誘惑に陥らないように、目をさまして祈り続けなさい。」と言われ、その後さらに2回の祈りの時を持たれました。けれども、弟子達はイエスと共に祈ることができず、眠ってしまいました。イエスは祈りによって、十字架で死ぬ心備えをされた後、「時が来ました。」と言われて、十字架に向かって行かれました。しかし、弟子達は祈りによって、イエスの十字架に対する心備えをすることはできず、イエスを裏切ることになります。イエスは今日も「目をさまして祈り続けなさい。」と私達に語っておられます。

14 : 43～49 イエスの逮捕

イエスのもとに、ユダが剣や棒を手にした群衆と共に現れました。ユダは自分が口づけする人を捕えるようにとの合図を決め、そのとおりに群衆はイエスを捕らえました。イエスは、これを神のみこころと受け留めて、逃げることもせず、捕えられても堂々としておられました。イエスは「こうなったのは聖書のことばが実現するためです。」と言って、みことばによって神のみこころを悟られました。しかし、この神のみこころは、イエスにとってつらく悲しく苦しいものでした。そこで、ゲッセマネの祈りによって、父なる神から励ましと力をいただいて、みこころに従う者とされたのです。私達もみことばと祈りによって、みこころを悟りみこころに従う者となることができます。

14 : 50～52 逃げる弟子達

イエスが捕えられた時、ペテロは剣を抜き、自分はイエスを裏切らないという誓いを果たそうとしました。また、ある青年はイエスについて行こうとしました。しかし、人間の熱心さではイエスに従うことはできません。弟子達はみなイエスを見捨てて、逃げてしまいました。彼らは、みことばによって、神のみこころを悟ることができず、また祈りによって、みこころに従う者になることもできなかったのです。

14 : 53～60 議会の裁判

群衆がイエスを大祭司の家に連れて行くと、全議会(ユダヤ人議会)が真夜中に開かれました。全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える証拠をつかもうとしました。多くの人がイエスに対する偽証をしましたが、一致しませんでした。またイエスも何も答えられませんでした。それは、この裁判自体が偽りのものであったので、たとえ正しい弁明をしても、誰も聞く耳を持っていないことをイエスは知っておられたからです。

14 : 61～65 イエスの証言

けれどもイエスは、大祭司が「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか。」と尋ねると、「わたしはそれです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずですよ。」とはっきりと答えられました。イエスは、ご自分が復活した後、神の右の座に着き、やがてさばき主として雲に乗って再臨すると証言されたのです。これは真実な証言でした。けれども、大祭司はこの証言は神への冒瀆罪に当たるとし、議会はイエスを死刑に当たると決めました。議会はイエスを救い主と信じませんでした。この救い主を拒む人々の罪の結果、イエスは十字架につけられることになりました。イエスは神に敵対する人類の罪を贖うために、死んでくださったのです。

14 : 66～72 ペテロの否認

ペテロは、自分はイエスを裏切らないという決意を持って、大祭司の庭に入りました。しかし、結果はイエスを三度拒んでしまいました。するとその時、鶏が二度目に鳴きました。すべてイエスが言われた通りになり、ペテロは泣き出しました。ペテロは挫折し、自分の弱さを知りました。けれども、ペテロが今後主に用いられるためには、この経験が必要でした。自信満々だったペテロが徹底的に自分に失望した結果、やがて徹底的に主に頼る人に変えられたのです。

15 : 1～5 イエスの証言

夜が明けると、全議会はイエスをローマ総督ピラトに引き渡す判決を下し、イエスをピラトに引き渡しました。死刑執行には、ローマ帝国による裁判が必要だったのです。ピラトはイエスに、「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」と尋ねると、イエスは「そのとおりです。」と答えられました。イエスは、この世の国の王ではありませんが、ひとり子の神として、ユダヤだけでなく全世界、全宇宙の王の王、主の主です。けれども、イエスを訴える祭司長達もピラトもその意味がわかりませんでした。イエスはピラトの前でも何の弁明もされませんでした。

15 : 6～15 ピラトの判決

過越の祭りでは、人々の願う囚人を一人だけ赦免することを例としていました。ピラトは、祭司長達がねたみからイエスを自分に引き渡したことに気づき、イエスを釈放したいと願いました。けれども、祭司長達は群衆を扇動し、バラバを釈放してほしいと言わせました。ピラトがイエスについて群衆に問うと、彼らは「十字架につけろ。」と叫び続けました。結局、ピラトは自分の立場を守るため、群衆のきげんを取ろうと思い、バラバを釈放し、イエスを十字架につけるために引き渡しました。イエスは、指導者達と群衆とピラトのそれぞれの罪の結果、十字架につけられることになりました。もし、私たちもこの場にいたら、彼らと同じようにイエスを十字架につける側にいたことでしょう。

15 : 16～20 兵士たちの嘲弄

イエスはむち打たれた後、兵士たちに引き渡されました。ローマ兵はイエスを徹底的に嘲弄しました。イエスは、ユダヤ人だけでなく異邦人からもあざけられ、ののしられ、ばかにされました。すべての人は神の前に罪人なのです。「彼(イエス)はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私達も彼を尊ばなかった。」イザヤ53:3 イエスは、すべての人の救い主として、すべての人の罪のために苦しまれたのです。

15 : 21 クレネ人シモン

兵士達はイエスを嘲弄した後、十字架につけるためにイエスを連れ出しました。イエスは十字架を背負って進みましたが、イエスの肉体はすでに弱り果てていたので、何度も倒れてしまいました。そこで兵士達は、通りがかりのクレネ人シモンに、無理やりイエスの十字架を背負わせました。彼の2人の子供の名前が記されているのは、彼らが初代教会において知られていたクリスチャンだったからです。シモンは、むりやり十字架を背負わされた時には、いやに思ったでしょう。けれども、その衝撃的な出来事から、やがて彼はイエスの十字架の意味を悟り、イエスを信じ、子供達もイエスを信じたのではないかと考えられます。イエスは、私達の身代わりに十字架で死んでくださったのです。

15 : 22～27 十字架につけられたイエス

イエスはゴルゴタの丘で十字架につけられました。イエスは、はっきりとした意識の中ですべての苦しみを受けるために、没薬を混ぜたぶどう酒を飲まれました。イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と記されました。ローマ帝国への反逆罪としての罪状がつけられたのです。けれども、実際は、人類が神に反逆し、神が遣わされた救い主を十字架に付けたのです。そして、イエスは私達の神に対する反逆の罪をすべて負って、十字架で神のさばきを身代わりに受けてくださったのです。

15 : 29～32 イエスをののしる人々

十字架につけられたイエスを見て、道行く人々は、「十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」とののしりました。また、祭司長や律法学者達も、「十字架から降りて来たら、信じるから。」と言ってあざけりました。さらに、イエスと一緒に十字架につけられた者達もイエスをののしりました。イエスがすべての人の罪を負い、身代わりに神のさばきを受けておられる時に、誰もそのことを理解せず、イエスをののしりました。イエスをののしる姿に、人間の罪の大きさを覚えます。イエスは全能の力によって、十字架から降りて来ることもできたでしょう。しかし、もし、イエスが十字架から降りれば、人類の救いは成し遂げられません。ですから、イエスは人類の罪を贖うために、どんなにののしられても、じっと十字架の苦しみを耐えてくださいました。

15 : 33～36 イエスの叫び

イエスは、3時に大声で、「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ。」「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と叫ばれました。イエスは、十字架上で、人類の罪に対する神のさばきを一身に受けて、父なる神から見捨てられるという苦しみを味わっておられたのです。このイエスの苦しみの叫びによって、私達は、イエスがご自分の尊いいのちをもって、私達の罪を確かに贖ってくださったことを知ることができます。イエスが、私達の身代わりに、神のさばきを受けてくださったことによって、救いの道が開かれたのです。

15 : 37～38 イエスの死

イエスは十字架上で死なれました。その時、神殿の幕が上から下まで真二つに裂けました。この幕は神殿の聖所と至聖所を分ける幕で、大祭司が年に一度だけ、この幕を通して、神が臨在される至聖所に入ることができました。けれども、イエスの十字架の死によって、人類の罪が贖われた結果、イエスを信じる信仰によって、だれでも大胆に神のみもとに近づくことができるようになったのです。

15 : 39～41 百人隊長の証言

十字架上のイエスの姿を、じっと間近で見ていた百人隊長は、イエスが息を引き取られた時、「この方はまことに神の子であった。」と言いました。百人隊長は、イエスについて詳しくは知らなかったことでしょう。けれども、イエスの十字架上の真実な姿を見て、「この方はまことに神の子であった。」と証言したのです。私達も、十字架で私達のために苦しみ、私達の罪を贖ってくださったイエスを救い主と信じて、「この方はまことに神の子であった。」との信仰告白をする時に、イエスの救いをいただくことができるのです。

15 : 42～47 イエスの葬り

イエスが死んだ時、アリマタヤのヨセフが、ピラトにイエスのからだの下げ渡しを願いました。彼はイエスを信じていましたが、有力な議員であったため、その信仰を公けにはしていませんでした。裁判の時にも、イエスの死刑に反対することもできなかったのです。けれども、イエスの死を目撃して、彼の考えは変わりました。イエスのからだの下げ渡しを願うとは、自分がイエスの弟子であることを公けにすることでした。ピラトは百人隊長にイエスの死を確認した後、ヨセフにイエスのからだを引き渡しました。ヨセフはイエスのからだを亜麻布に包み、墓に納めました。そして、安息日を迎えました。

16 : 1～4 イエスの墓の入り口の石

安息日が終わった日曜の早朝、女達はイエスのからだに油を塗りに行こうと思い、墓に向かいました。女達は道々、だれか墓の入り口の石を取りのけてくれる人がいるだろうかと話しながら、イエスへの深い愛情のゆえに、とにかく墓に行ったのです。すると、墓の入り口の石は、すでにころがしてありました。私達とはもすれば、常識的に先々のことを考えすぎて、否定的に物事を考えることがあります。もちろん、計画を立てることは大切ですが、計画通りに行かないことも多々あります。女達の行動は、常識的に考えれば無謀と思うところもあります。けれども、とにかく主のためにという思いを持って墓に行った時に、石はすでに転がしてあったのです。「主の山の上には備えがある」のです。女達の行動力は、主イエスの復活を知るために用いられました。

16 : 5～6 イエスの復活

女達が墓の中に入ると、全く予想外のことが起こりました。女達はイエスのからだに油を塗りに来たのです。けれども、そこにはもはやイエスのからだはなく、代わりに御使いがいて、女達にイエスの復活を告げたのです。女達は、墓の中で十字架につけられたイエスをさがしました。けれども、イエスのからだは、もはや墓の中にはありませんでした。なぜなら、イエスはよみがえられたからです。「あの方はよみがえられました。」という御使いの言葉は、イエスの復活の宣言です。それは女達にとって驚きであったと共に、私達にとっても驚くべき出来事です。けれども、このイエスの復活は歴史的な事実であり、復活されたイエスは、今も私達の救い主として生きておられます。そして、イエスを自分の救い主と信じる者に、罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださいます。

16 : 7 ガリラヤでの再会

御使いは女達に、「イエスはガリラヤに行かれ、弟子達はそこでイエスと会うことができます。」と、弟子達とペテロに伝えるようにと言いました。よみがえられたイエスは、この日、エルサレムで弟子達と会われます。けれども、その後、ガリラヤで弟子達と会われました。ガリラヤは、弟子達にとって、イエスの弟子となった信仰の原点の場所でした。イエスの死に直面した弟子達は、信仰の挫折を覚えていました。特に、ペテロは、イエスを3度否定したことで、深く傷ついていました。イエスはそのような弟子達とガリラヤで会われることにより、彼らの信仰を回復させたかったのです。そして、弟子達はガリラヤでよみがえられたイエスと会うことにより、確かに信仰を回復させたのです。

16 : 8 女たちの恐れ

墓の中で、御使いと会った女達は、初めはイエスの復活の喜びよりも、御使いと会ったことによる驚きと恐れの方が大きく、墓から逃げ去りました。女達にとっては、御使いと会うことは全くの予想外のことであり、しかもイエスの復活の知らせという予期せぬ知らせを聞き、気も転倒してしまい、最初は、話したくても何も話せなかったのです。しかし、やがて気も落ち着いてきた時に、弟子達にすべてのことを伝えたのでした。イエスは確かによみがえられ、今も生きておられる救い主です。イエスを信じる時に、私達の心からすべての恐れは取り除かれ、平安を心にいただくことができます。

16 : 9 ~ 11 マグダラのマリヤの知らせ

よみがえられたイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現されました。マリヤはすぐに、嘆き悲しんで泣いている弟子達の所に行き、イエスがよみがえられたことを知らせました。ところが、弟子達は、イエスが生きておられ、お姿をよく見たとマリヤから聞いても、信じようとはしませんでした。そして、相変わず、イエスの死を嘆き悲しんでいたのです。私達もよみがえられたイエスを信じるまでは、救いの喜びを経験することはできません。

16 : 12 ~ 13 二人の弟子達の知らせ

その後、弟子達のうちの二人が、エマオといういなかに向かっていたおりに、よみがえられたイエスとお会いしました。(ルカ 24 : 13 ~ 35) 彼らも、すぐにエルサレムに戻り、よみがえられたイエスとお会いしたことを弟子達に知らせましたが、弟子達は二人の言うことも信じませんでした。弟子達の心は堅く閉じていて、イエスの復活の知らせを受け入れることができなかったのです。

16 : 14 ~ 15 弟子達に現れた復活のイエス

その後、よみがえられたイエスは11人の弟子達に現れました。そして、彼らの不信仰とかたくなな心をお責めになりました。それは、彼らが復活のイエスを見た人達の証言を信じなかったからです。よみがえられたイエスは弟子達に、全世界に出て行き、福音を伝えるようにと命じられました。イエスは今、天におられますので、私達は当時の弟子達のように、この目で復活のイエスを見ることはできません。今日私達は、聖書に記されている福音によって、イエスの十字架の死と復活による救いを知ることができます。そして、心を開いて、私達の罪のために死に、三日目によみがえられたイエスを自分の救い主と信じる時に、イエスは私達の心に、救い主として来てくださるのです。

16 : 16 ~ 20 信仰とバプテスマ

聖書の救いは、まず私達のすべての罪が赦されることです。罪が赦された時、私達は永遠のいのちをいただき、神の子どもとして新しく生まれます。そして、父なる神との親しい交わりの中に生きる者とされます。また、いつ死んでも天国に行く確かな希望が与えられます。この救いは、私達の罪のために十字架で死に、三日目によみがえられたイエスを自分の救い主として信じることによって与えられます。イエスは、ご自分を信じる者はバプテスマ(洗礼)を受けるようにと教えられました。バプテスマは自分の信仰を公けにする時であり、バプテスマによって教会の一員に加えられます。

今まで、マルコの福音書を学んできました。この学びを通して、あなたも神の子イエス・キリストの福音を信じ、神の救いをいただきませんか。(1 : 1) ぜひ次のお祈りをして、イエスをご自分の救い主として信じてください。神の祝福をお祈りいたします。

信じるための祈り

神様、私は罪人です。自分で自分を救うことはできません。今、私の罪のために十字架で死に、3日目によみがえられたイエス・キリストを、私の救い主と信じて、心にお迎えします。私のすべての罪をゆるし、永遠のいのちをお与えくださったことを信じて、感謝いたします。これからの私の人生を導いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

16：9－20と別の追加文について

現在、聖書の原典は残っていません。しかし、聖書には数多くの信頼できる写本が残っています。そして、それらの写本を照らし合わせるにより、原典に限りなく近い聖書本文がほぼ確定しています。しかし、まだ議論の余地のある本文もあります。マルコ16章9節以降もその一つです。最も信頼できる2つの写本は16：8で終わっています。もともとマルコの福音書の原典は16：8で終わっていたのか、あるいは何らかの理由で失われたのかは、はっきりとは分かっていません。2世紀前半の写本には、すでに16：9－20の結びの文が記されていますので、結びの文としてはこの文章が一番信頼できます。ただ、この箇所はマルコ以外の記者が書いた文章だと考えられますので、この箇所を読む時は、他の福音書の内容と照らし合わせながら読むことが大切です。